

書 評

石井寛治編『石井家の人びと―「仕事人間」を超えて』（日本経済評論社・2021年4月）

杉浦 勢之

本書を手にして最初に連想したのが、トーマス・マンの『ブッデンブローグ家の人びと』、そして同書に着想を得たとされる北杜夫の『楡家の人びと』であった。『ブッデンブローグ家の人びと』は、第一次世界大戦前の作品で、ビーダーマイヤー時代の終焉する1848年革命をまたぐドイツ商家の没落過程を、『楡家の人びと』は斎藤茂吉をモデルに第二次世界大戦をまたぐ病院を営む家族の歴史が描かれている。時と所を異にするが、そこには旧体制に勃興した家族内部の世代交代と歴史の激変を通じた価値観の相克、その中に現れる家族内部の「実業と芸術」との間の揺れが描かれている。両書とも作者自身の家族をモデルにしながら、小説家の透徹した目と優れた筆致により、時代が抱えた亀裂を、事件史では終わらせることなく、同時代の多くの家族が抱えたであろう、断絶した一つの時代の空気と、そこに浮かび上がる人間の本质として見事に描き出している。

もとより本書はそのような意味での小説＝フィクションではない。「あとがき」によれば本書成立の機縁は、通信省の技系官僚であった石井浅八の7人の子供たちの一人、五男の章雄が、四男で編者を引き受けた近代日本経済史家である寛治に、石井家のファミリーヒストリーを編纂することを提案したことであったということである。（以下敬称を略させていただく）。石井浅八と伴侶糸子についての出自から出会い、通信官僚としての浅八の業績、糸子の子育てと敗戦後の家計の苦境、戦後改革のただ中、旧通信省の通信系技官であった浅八の苦渋と新民法移行による家族との軋轢、浅八急逝とその後の糸子のクリスチャンとしての生き方と子供たちの自立を扱った第1部を寛治が執筆し、こどもたちのその後の「人生行路」（パーソナル・ヒストリー）については、それぞれが自由に執筆することとし、すでに亡くなられ、あるいは執筆可能な環境にない兄弟については、寛治が執筆したうえ、同僚の回想および故人の残した文章を掲載する（長男敏夫）、あるいはその家族が執筆を担当する（次男久雄、三男康雄）というかたちをとり、編者の寛治が第1部とつなぐ一文を添えることで第2部が構成されている。これとともに、同書には資料として石井浅八の電信電話学会における帰朝講演「本邦における市内電話の普及発達並に之が経済的施設に関する一考察」が付されている。日本の通信事業の歴史を考えるうえで史料的价值を有するものであるが、本書を通読したものは、この講演が第2部の石井家のこどもたちの「ものがたり」のイントロダクションともなっていることに気づかされる。

このように本書は執筆上大変複雑な構成となっているのだが、経済史家である四男寛治が、兄弟姉妹にそれぞれの「人生行路」を自由に描き出してもらいつつ、戦争を挟む時代の「仕事」や「家族」の課題を浮き彫りにしていくことで、一つの家族の肖像を、個別家族や同時代の経験にとどまらない「生きることの意味」を問いかけるものとしている。このことが、小説家の手による先の2書とは異なるかたちで、しかしおそらく決して無縁ではないモチーフをもって、

本書を成立させることになったといえよう。

ところで編者は、本誌第13号（2022年3月）に「近代日本の郵政官僚に関する覚書」を発表しており、①で編者の郵政史にかかわる一連の研究に触れ、本書についても紹介している。しかし同論考の紙幅の大きな部分は、②「郵政官僚の専門と教養」に充てられており、前島密、坂野鉄次郎、田中次郎、稲田三之助、大橋八郎、梶井剛、松前重義が挙げられている。挙げられた通信官僚たちは、日本の通信政策史ないし行政史・事業史において逸することのできない高級官僚であり、文官のみならず技官が選ばれていることは、後に述べるように、通信省が近代日本にもった意味を考えるうえで重要である。それと同時に彼らの「専門」のみならず、「教養」が考察の対象とされているところに、特徴がある。これは個人の伝記的研究を除けば、研究史的にみて異例なテーマの立て方である。

評者は以前、明治期の政府上層部と大正以降の政府上層部（含意は政権をになう政治家と上級官僚）に質的落差を感じ、キャリアパスの違いについて問題関心を抱いていた。明治期については藩閥という言葉に明らかなように、前時代の帰属が大きく影響した。それと同時に、維新の動乱（「革命」と「内戦」）を通じて、どのように生き、身を処したかが、いわば人格的スクリーニングとして機能し、明治政府の中で共有され、能力選抜の暗黙の条件となったのではないかと思われた。生死にかかわることであってみれば、その評価にはかなりの妥当性が感じられていたであろう。もちろんこれは当該主体に対する歴史的評価＝価値判断としてではない。システム形成過程での人的「兼ね合い」として、である。これに対し、大正以降を考えると、高等教育を含む近代教育制度が確立することによって、キャリアパスがシステム化されていく。教養については、旧制高等学校がない、専門については旧帝国大学によって教授され、学位として認定されたというのが制度的にも学説史的にも一般的理解であろう。当初評者は、財政金融史を考えるうえで、文官たちの「専門」知の形成に関心があり、明治後期にどのような教科書が使われていたかに興味があった。これは歴史上の財政政策や金融政策を、現代における財政理論、金融理論が公認する「真理」によって機械的に裁断することに強い違和を感じていたためである。過去の史資料に当たる限り、歴史的制約条件を無視した「理神の視点モデル」では、とても当該の時代は像を結ぶことはできそうになく、むしろ現在の分析者の足場を危うくし、過去とともに未来を切断し、ミスリードさせかねないと感じられたからである。

次元を限定しさえすれば、自然科学であるならば、ニュートンの「無時間モデル」を研究者の「真理」の足場（準拠枠）とすることに安んじられるかもしれない。しかし不可逆的な「生」の時間を前提とする社会を課題とするとなると、現代における学知主体の立場（パラダイム）と、当事主体の、時代に拘束され、制約された立場（パラダイム）とは丁寧に切り分けて議論・評価されねばならない。（加えて通信官僚にあっては、技官と文官との関係が、基本的にニュートン力学の応用問題である工学的「真理」ないし応用の「合理」と、ニュートン力学を範型としつつも、経路依存的な社会科学的妥当や状況依存的判断との間の緊張を孕んでいたはずである）。さらに、そこに歴史的文化的時間を挿入するとすれば、「価値中立的（ヴェルト・フライ）」という足場を担保する保証は、はなはだ危うい。問いは分析主体自身にも向けられざるを得ず、事前判断と事後了解とを切り分けるために、厳しい認識論的緊張が必要とされる。さもないければ「神なき時代」に、分析主体は容易に泥のような虚無主義、相対主義の沼地に陥ってしまうからである。このような方法手続きを、自らに緊張を強い、鍛錬してきたのが近代の経済史学であり、それはいまこの時の状況においていかなる判断をおこなうかということにも深く影響してきた。

「歴史は鏡」という、今では陳腐化され、無視されるようにすらなつた感のある言葉の意味は、疎かにされてはならない。反メデイチ派の疑いでいったん失職したニコロ・マキャヴェリは、『君主論』（それは状況制約の下での政策パラダイムの大転換を、文字通り命がけで目指していた―彼は投獄され、拷問を受けている）を著述していたころ、わずかに残された所有地の森で木こりたちと談笑しながら森林の管理をおこない、その後は泉の水辺でダンテやペトラルカの恋愛詩に若き日の想いを楽しみ、夕べには泥だらけの野良着を脱いで礼装用衣装に着替え、威風堂々と書齋で古代人たちの宮廷に踏み入るのだと書簡で友人に語っている。（ついでながら、評者はそこに、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』で思わず表白してしまったと思われる「人類本史」の一日を連想する）。「シヴィック・ヒューマニズム」の源流（ジョン・ポーコック）であるマキャヴェリが、一日の過ごし方において自分に課したマナー（所作）と儀礼（世事を疎かにせず、感性を柔らかく保ち、「仕事」に当たって思考を心身ともに引き締める）にあえてこだわりつづけたというところに、過去と現在とを切り結び、未来に解き放とうとするこの瞬間（＝モーメント）の緊張と「こころざし」を見るべきであろう。（ここでモーメントという場合、ジョルジョ・アガンベンのいう「パウロの時間」あるいはヴァルター・ベンヤミンの「時間」＝カイロスを含意している）。マキャヴェリは、時間の外交官（いうまでもなく彼は内政・軍政のみならず、手練れの外交官であった）として礼服をまとい、歴史上の当事主体である古代人と「時間」と「空間」を共にし、対話・討議を重ね、そこから現在の課題＝使命に差し向けられていたのである。（ハンナ・アーレントは、そのような勇気を持ったのがマキャヴェリだけであったことに、驚きを隠していない）。マキャヴェリズムは後世誤解されたような、機会主義（オポチュニズム）、冷笑主義（シニシズム）とは無縁である。ポーコックの筋（マキャヴェリアン・モーメント）に従えば、その緊張感は通説とは異なり、古代共和主義の復元（アリストテレス）から、マキャヴェリにとってのいまこの時であるチェーザレ・ボルジアとの内的格闘、三代にわたるメデイチ家との虚実の「被膜＝ポロシティ」を通じて、彼にとっての未来であるスコットランド啓蒙―アダム・スミスの道徳哲学、政治経済学、アメリカの独立革命にまで届く、共和主義の「精神」とそこにおける「徳」という課題を切り拓いた。

編者が「教養」を問題にするとき、おそらく問われているのは、そのようなことであろう。先に旧制高等学校について述べたような、教育課程の通り一遍の話をしているわけではない。当面我々の世代が経済史研究の足場の一つとしたマックス・ヴェーバーのエートス論が念頭にあることはいうまでもなからうが、どうもそこにとどまっていけないようなのだ。ピューリタニズムの先に、あるいは手前に、普遍宗教と個との対峙を読みこみ、官僚たちの「仕事」と人生に及ばせている。もちろんヴェーバーにも、世界宗教についての浩瀚な研究がある。しかし彼の宗教社会学研究は事実的に未完に終わっており、方法的には「理念型（イディアルタイプス）」と「比較」研究にとどまる。エートスについて語っても、個別実存の「信」の問題に入っていくことはない。新カント派的抑制＝禁欲が効いているのだ。これに対し、普遍宗教とは何かという難問に、歴史的諸個人の「信仰」と世俗的「実践」を重ね考えていくとなると、これはかなり厄介な問いとなる。「資本主義の精神」を超えるだけでなく、歴史のなかの「実存」、世界のなかの「実存」という、普遍と個を巻き込んだ課題を分析主体自身が抱え込むからである。あたかも歴史の法廷の審判者であるかのように語るが、それを語る自らが歴史によって裁かれる被告であることを知っているものを歴史家と呼ぶ。彼の棲家は、いまを積み重ねる歴史にしかない。先にマキャヴェリの一日を紹介したのはそのためである。そこでアジェンダ・セッティングされたのが、「『仕事人間』を如何にして超えるか」であってみれば、それは文字通り編者自身にも跳ね返ってこざるをえなくなる。学知主体である編者が、当事主体としてのこれ

までの自身をも祖上の一つに挙げたところに、本書の独自性と、あまり気づかれないところだが、歴史家が自己言及することの恐ろしさがある。本書第1部で取り上げられる石井浅八をめぐる通信官僚群像という意味のみならず、本書の異例さと複雑な構成を貫くテーマを知るうえでも、本誌掲載の当該論考を併せ参照されることを強くお勧めする。

さて、本書に戻ろう。この本において「石井家」は、二つの意味を指している。一つはいうまでもなく、通信省の技術官僚であった石井浅八と伴侶糸子の婚姻によって成り立った両親と六男一女の家族のことであるが、それとともに石井浅八と糸子が終の棲家とし、こどもたちを育んだ田園調布の家のことである。田園調布といえば、今では東京の最高級の住宅地として知らぬものはない。しかし、第1部、第2部で想起されている石井家が移り住んだころの田園調布は、東京西部の雑木林などの残る郊外地との境界として描かれている。のどかに回想されているその風景は、評者の世代であればもう少し西方、都下で見た景色である。とはいえ、田園調布は、よく知られるように、渋沢栄一が理想的な住宅地を構想し、開発分譲した地域であり、当初より、エベネザー・ハワードによって構想され、レイモンド・アンウィンによって具体化されたヨーロッパの田園都市を踏まえた分譲邸宅地であったことに変わりない。(ただし、現実これを手掛けた栄一の三男秀雄は、田園都市の聖地レッチワースよりも、サンフランシスコの田園郊外に惹かれてしまうのだが)。ハワードの田園都市構想(ダイアグラム)は、3つの磁石(場)で構成されている。都市(town)、田舎(country)、そしてそれを総合する都市と田舎との結婚=田園都市(Garden City)である。結婚は錬金術、トポスの力を現す磁石のイメージは、動物磁気説を唱えたフランツ・アントン・メスメル系の系譜であろう。ハワードのユニークさは、二項対立で抱えられていた都市と田舎のそれぞれの利点と欠点とを磁石のメタファーを用いて並記しつつ、両者の「魅力」を総合するものとして田園都市を描き出したことにある。そこでは、自由(Freedom)と協力(Co-operation)とが結合されている。産業革命による環境劣化を批判しつつ、宗教の世俗化過程(ここでは無信仰ではなく非教会化)で生じた精神的「空白」を社会改革によって埋めようとしたシャルル・フーリエやロバート・オーエンなどの初期社会主義(ユートピア主義)、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスらの美的社会改革運動、心霊主義(スピリチュアリズム)―フェビアン協会や神智学から大きな影響を受け、新教育運動と並行し、自然と共生する職住近接空間のイメージで構想されたものであった。ハワードの「ガーデン」にはエデンの園が含意されていると思われるが、日本ではまず農学者の横井時敬により「花園」と訳されて紹介され、次に内務省地方局有志が「田園」と翻訳した。東アジアでは陶淵明の『桃花源記』によって桃源郷のイメージがあったからかもしれない。その後、田園都市構想はニュータウン構想として世界に広がるが、日本では職住が分離したままのベッドタウン化にとどまった。(ちなみに『田園都市』は、大平政権で一度、そして現岸田政権においてもDX化の絡みで、「亡霊(ゴースト)」のようにもう一度現れる。衆知を集めた宏池会の歴史的遺産が「一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」とならなければと願わずにはいられない)。回想にはお屋敷や教会、瀟洒な並木道といった西欧文明の香り豊かな情景が出てくる一方、石井家のこどもたちは郊外の日本の農村のくりなす自然や緑地を思い切り満喫している。そこは日本が目指した当時西欧文明の最先端の空間デザインと、日本の列島社会の風土が接する場であった。おそらくこのような境界域を自在に行き来して育ったということが、石井家のこどもたちの情緒にふくらみを与え、その後の人生行路にも潜みつづけるトポスとなったといえそうである。西欧と日本との対比は、本書の基調をなすとともに、日本近代経済史家である編者の研究の変わらない基調でもある。(もっとも最新の研究には、新た

な転調が現れているように思われる)。

同時に、本書にはもう一つの対比が基調に流れている。それは石井浅八と糸子との間に見いだされる。石井浅八は、1891年香川家の農家の三男に生まれた。同時代の地方の俊才の例にたがわず、その頭角を現し、京都帝国大学に入学、電気学科を卒業して当時としては最先端の電気通信技術である「電信電話事業の発展を支えるべき人材」として逡巡省に入省している。そこには「立身出世」を目指した明治の理系青年の姿が浮かび上がる。一方旧姓山崎糸子は、1906年博多の洋酒商の家に生まれ、商才に長けていたが地方の勤労生徒の教育にも情熱を傾けた母わかには育てられ、県立福岡高等女学校を卒業している。戦前日本の教育は経済の発展とともに、時代の求める人材に合わせ、複線型教育をとった。それも度々制度が変更されたため、複雑なシステムとなっていった。政府は男子教育については私学を含め厳しい国家規制をしいたが、女子の中等教育以上については比較的ゆるく、公立の女子系師範を除き、高等女学校(新制中学・高校相当)以上の高等教育については私学の自由を認め、任されていた。糸子は高女卒業後、東京の音楽学校(高等専門学校と思われる)に進むことを希望していたが、関東大震災などによって断念することになったらしい。長女弘子の回想によれば、近所の教会に賛美歌を歌いたくて通っていたとのことで、そこから西洋音楽を学びたいとの想いが募ったようである。

いずれにしろ、この時期に高等女学校に進む女子はそう多くはなかったから、糸子は地方においてほぼ最高の女子教育を受けたことになる。教会に通っても、信仰に入るにはいたらなかったが、浅八の死後、弘子の推測では、キリスト教に入信したこどもたちを通じ、キリスト教に触れるなか、受洗することになったという。結婚や育児、戦争や生活との戦い、伴侶の死といった長い時間をかけ、人生と向き合った後にたどり着いた、穏やかな受洗であったといえるのかもしれない。(比較的自由であった女子教育を通じて日本の若い女性が信仰に触れるようになったとしても、結婚生活において信仰を維持することが難しかったことから、入信がためらわれたため、クリスチャン・ファミリーを育てることが、明治期の宣教師にとっての課題のひとつであった。津田梅子は生涯独身であったし、山川捨松が大山巖と結婚したため、一時疎遠となったのもそういった事情によるのであろう)。弘子によれば、糸子は結婚に当たり、習っていた三味線や琴でなく、リードオルガンを持参したとのことである。石井家には『婦人之友』が置かれており、家事・育児について、この雑誌を指針とし、羽仁もと子の影響をうけていたのではないかとされている。このことは、新しく営まれることになった石井家には、ピエール・ブルデュエのいう「文化資本」が備わっていたことを意味する。ただし石井浅八と糸子との場合、技術系官僚として立身出世の途を邁進する禁欲的明治青年と、音楽などの芸術に感性の広がりを楽しむことのできる大正の新しい女性との文化の混濁が生じたことにもなる。これもまた、石井家のこどもたちに引き継がれ、多彩に人生に広がりを与えていく対比となった。この二つの対比を通じ、石井家のものがたりは織りなされていく。

石井浅八の逡巡省における仕事は、1930年代にピークを迎えている。資料として掲載された浅八の講演では、日本の官営電話事業の欧米と比較しての遅れの原因を探り、当該事業についての公衆の理解のみならず、①当該地域の経済的事情、さまざまな社会インフラの整備状況や住環境の調査研究による潜在的電話需要の把握と、敷設のため必要とされる施設の準備、②電話勧誘員の組織化と運用、政変によって予算が左右されることを防ぐため、周知宣伝を通じ国民による電話政策への安定的支持を確保することを目的とした勧誘政策、③電話料金や電話創設費の低減をめざした技術の調査研究といった総合的な政策が提案されている。長期に事業拡張を進める上で必要な資本手当てについては、現状の一般会計では難しいとして、特別会計を

設ける案とアメリカの事例を挙げ民間会社とする案を併記し、官民相互の統制あるいは民間会社相互の合理化のための連携を求めている。

読み得る限りでは、民営化案により合理性を感じさせる講演内容である。『電信電話学会雑誌』(1932年11月)に掲載されているので、この講演自体はそれより翻る。この後、1933年挙国一致内閣である斎藤実内閣において、大蔵大臣高橋是清、通信大臣南弘のもとで「通信事業特別会計法」が成立しているから、これに先行するものであった。「通信事業特別会計法」は電信電話事業にとどまらず、通信事業として郵便、郵便為替、郵便貯金事業などの事業を含むものであったから、通信省全体としてはまずまずの帰着点であったかもしれない。しかし、テレコミュニケーションを専門とする技術官僚の浅八にとって、それがベストであったかどうかについては、いささか判断が躊躇われるところがある。というのも10年代末には、すでに通信次官を辞した内田嘉吉や渋沢栄一らによって日米電信株式会社計画案、同じく通信次官経験者であった小松謙次郎による国際電信株式会社計画がそれぞれ出されている。電信法で通信事業の「官独占」が規定されていたこともあり、これらの計画は実を結ばなかった。さらに浜口雄幸の民政党内閣において、小泉又二郎通信大臣の下で「日本電信電話株式会社法案」が検討されるものの、これも実現するに至らなかった。

これをみると、当時から通信省部内の一部の官僚にあつては、海外ケーブル敷設との関係もあり、事業経営上、電信電話事業については民間会社設立に合理性が認められていたといえよう。1938年には内国事業と切り離れた国際事業部門のみが、国際電気通信株式会社として実現している。戦後の国鉄民営化と並ぶ電電民営化と郵政民営化は、経済政策的に民営化一般として括られる傾向がある。しかしこの講演からは、事業に内在する諸課題や経営的、技術的必然性において、後代の両民営化が本来性格を異にする要請によってなされるべきものであったことが浮かび上がってくる。これはGHQの戦後改革方針において顕わになる。同講演は、30年浜口雄幸が襲撃され、32年の5・15事件によって犬養毅が殺害されるといった血生臭い時代の政権の揺らぎのなか、事業の経営形態に選択の余地を残しつつ、経営と技術と組織との関係を整合的にとらえ、論理的に開陳したものであった。

「通信事業特別会計法」成立とともに、内国電気通信事業については官独占による経営が確定した。電気通信系の通信官僚であった浅八は、官専掌の決まった内国電話事業の発展に尽力していくことになった。1932年満州国の設立、1933年日満合弁の満州電信電話株式会社の設立を受け、38年日満電話建設課を拝命、日本発世界最先端の技術であった無装荷ケーブルを採用し、東京-福岡-釜山-奉天間を結ぶ長距離海底ケーブルの敷設に邁進した。なお浅八は、37年に高等官二等に昇進したので、勅任官となっている。高等官二等は省の局長、軍の将官クラスとされる。通常技官は、技師が奏任官、技手が判任官で、これをもってしても工務局長ではなかった浅八の昇進は、当時の技官としては異例なものであったといえよう。このことは、日満海底ケーブル敷設が、国策上重視され、浅八への期待がいかに大きかったかを示している。加えて、満州国の複雑な統治機構、関東軍の存在等を考えれば、勅任官であることが、工事の交渉等で必須とされたのかもしれない。工事完了後、後輩の松前重義が先に本省技官最高位の工務局長に就任していたことから、東京都市通信局の工務部に移り、1940年勲三等瑞宝章を授けられ、42年通信省を退官、電気機械統制会に転身、45年に同会理事となったところで敗戦を迎えた。浅八が努力し、その完成を目指してきた電気通信事業のありかたは、これによりがらりと変わってしまう。

それは講演の段階で浅八の予想できた「政変」レベルをはるかに超える制度変革の始まりを意味した。敗戦後GHQ指令により、財閥指定を受けた国際電信電話会社は解散され、同事業

は戦時行政改革で外局となっていた通信院から昇格した通信省に移管された。さらに通信省も郵政3事業（郵便・郵便貯金・簡易保険）を現業として残す郵政省と電気通信省に分離（郵電分離）され、ついで内国・国際電気通信事業部門は日本電信電話公社として切り離されることになった。（国際電気通信業務は講和後、1953年に再度国際電信電話会社として民営化される）。「公社」形態は戦前になかった選択肢である。GHQによる日本の非軍事化方針と民主化方針、さらには公務員身分についてのマッカーサー書簡などをめぐり、日本に採用されることになった。占領政策の一環として、アメリカの独立規制委員会に範をとった（独立）行政委員会と並び、日本の行政組織に移植されたものである。（アメリカの場合、市場の失敗にたいする公共の担保が課題であったが、日本においては公共を官から分立させるというGHQの意図を日本側が理解できなかったため、混乱の種となった）。講和条約締結で次々に縮小撤廃改組されていった行政委員会とは異なり、3公社および5現業はひとまず日本に定着していったが、それぞれ民営化過程で問題とされ、延いては浅八のこども二人が格闘しなくならなくなったリクルート事件の遠因の一つともつながっていく。

戦後改革では、GHQの指令により、金庫・営団・統制会が解散ないし公庫・公団・公社・3条委員会・8条委員会（審議会）等に組織再編されていった。なお公企業体としてみれば、戦後改革によって委員会方式によるガヴァナンスを採用した法人組織は、国鉄・電電公社・帝都高速度交通営団・日本放送協会・住宅公団・首都高速道路公団・京浜外貿埠頭公団・阪神外貿埠頭公団（以上特殊法人）・日本銀行（以上認可法人）であり、この中で現在残っているのは、日本放送協会と日本銀行の二つだけである。一連の構造改革・民営化を、行政改革ならびに労働改革の戦後史という視点に重ねて見直せば、多くを説明しなくとも、それが戦後改革の長い修正・清算の過程であったことが見てとれる。（同時に、公共性をめぐり、いま何が問題とされているのかも浮き上がってくる）。そのことを知るすべもなかった浅八が、このGHQ改革をどう受けとめ感じたかについては、残念ながら本書においても詳らかではない。

GHQの占領政策の一環として統制会の解散が命令されたため、浅八は失業の危機に立たされ、敗戦後の混乱のなか、比較的裕福だった石井家は、経済的困窮に立ち向かわざるを得なくなった。敗戦後の石井家の経済状況に関し、本書には浅八たち旧通信省退官者の生活支援のために、敗戦直後さまざまな方策が講じられていたことが記されている。正史では見ることができない戦後史の伏流といえるが、家庭内資料を使い、個別家族の家計にまで立ち入った本書の記述によって、その一端に触れることができる。編者で当該部分の執筆を担当した四男寛治が経済史の研究者であるがゆえに、このような家族の機微に触れるデータや事実関係も明らかにされたといえよう。この伏流とその後の推移については、研究者として大いに関心のあるところであるが、当事者の浅八にとってみれば、戦後は唯々不本意で苦渋に満ちたものとなった。敗戦という事態は、どの国においても、特に前時代にある程度の活躍を果たした男性にとってなかなか受け入れがたいものであったに違いない。権威（オーソリティ）というものは、レジマシーを失うと思いのほか脆く傷つきやすい。敗戦とはその最たるもので、それは家族、あるいは学校、職場において露になった。家父長権、教育権、経営権が揺れるなか、新時代を生きていかなければならない若者にとって、家庭においても、学びの場においても、また職場においても、まず越えていかなければならないものであったろう。戦争を境に石井家の中にも、戦前と戦後という新たな対比が生まれていく。それは、年長世代である長男敏夫の結婚と次男久雄の宗教人たらしとしての職業選択において顕在化した。時代の過激な変化にあって、家父長的権威から抜け出せない浅八と、戦後を生きはじめようとするこどもたちとの間に生じたずれ、生活のやりくりやこどもたちの養育と教育に邁進する糸子がそれをつなぐという構図、お

そらくそれは石井家だけではなく、日本の家族の多くでみられたものではなかったと思われる。しかし編者は、そこに普遍的価値と対峙することなく「仕事人間」でありつづけ、家父長権にこだわりつづけた技術系官僚浅八の限界を見て取っている。

第1部の後半は、糸子の戦後における「がんばり」と成長したこどもたちの家計支援に話しは移っていく。「あとがき」によれば、「母物語」のようだと評されたとのことであるが、評者としては、むしろその点が本書の持つひとつの美点であるように思われる。第一にそれが敗戦後の日本の現実を素直に表現していると考えからである。糸子の日記や家計簿のなかに、その時代の「生きざま」は赤裸々に反映されている。第二に本書は、戦後高度成長の過程で作り出された「男たちの物語」によって後背に退けられていった、糸子たちにはじまる女たちの戦後史から視線を外していない。おそらくこのことを見逃してしまうと、本書の「『仕事人間』を超えて」というサブタイトルの意義は半減してしまうであろう。いま少子化を憂い、生産性の改善による賃金上昇を唱えるのであれば、まずその前にこの国が、「法の下でのすべての国民の平等」を掲げた戦後70年余を経てなお、「女性の活躍」をことさら新しい課題のごとく語らねばならない社会であり続けてきたことにこそ、心をいたすべきであろう。

第2部は、石井家のこどもたちのそれぞれの「人生行路」が綴られている。しかしこの部は、通信官僚石井浅八のこどもたちのその後というには、あまりにも一人一人の人生が多彩で興味深い。六男一女のこどもたちが戦後日本の経済や社会のエポックメイクにかかわっているため、通読すれば日本の戦後経済史になっているとの感がある。よくよく考えてみれば、長子敏夫の出生年が1927年、末子の義脩の出生年が44年と17歳の年齢の開きがある。戦後の復興と急速な経済成長の中で、日本の課題とされることもめまぐるしく変わっていった。それぞれが優秀であったということにもよろうが、戦後日本の変化速度では十分、一世代分に当たるこの年齢差が、彼や彼女たちの求める「仕事」の多様性に反映していったとみることができよう。もっとも石井家は大家族のようにみえるが、戦前の家族であれば「普通」といってよい。評者の父の兄弟姉妹は6人（1人が早世）、母の兄弟姉妹も6人である。ところが評者の世代になると、戦争で結婚が遅れた父との年齢差があった母方のいとこ（石井家の人びとと違い、いずれも戦後生まれ）は申し合わせたように世帯当たり2人である。石井家においてもこどもたちの次の世代については、ほぼ同様の傾向が見て取れる。一世代、これだけの短期に世帯当たりのこどもの数が激減したわけで、マクロの人口動態とは別に、社会が激変しないわけではない。ちなみにある時期このことに気づいた評者が母に理由を問いただしたところ、「住環境」と一言で片づけられた。ほかにも複合的ファクターがありそうなものだと思わないではなかったが、戦災を挟んで戦前から戦後にかけて、住環境の劣悪がはなはだしかった東京に住み続けていたという事情もあり、何より生んだ当の本人にきっぱり断言されたので納得するほかはなかった。これからこの国では『〇〇家の人びと』は成り立たないのかもしれない。家族のありようは、さらに加速度的に変化していくことになろうが、その起点はやはり敗戦にあったのではないか。そういった意味でも、同時代を生きてきた読者、あるいはその次の世代の読者には、その落差も含め本書を手に取り、第2部をぜひ熟読いただきたい。

長男敏夫は1927年生まれ、45年に東京帝国大学農学部獣医学科に入学し、48年同農学部畜産学科を卒業、51年より東京大学農学部助手となっている。日本の大学の研究制度に限界を感じ、61年シカゴ大学留学のため渡米、62年からデューク大学医学部助教授、その後ノースウェスタン大学医学部教授・学科長に就任した。その間研究業績により、日米の多くの学会賞、学術賞

を受賞、神経毒学創設者としての評価を得ている。浅八が通信ネットワークをフィールドとしたとすれば、敏夫は生命の神経ネットワークをライフ・テーマにしたといえよう。もっとも『石井家の人びと』の読者としては、輝かしい学術業績もさることながら、敏夫が助手時代に浅八の誤解から結婚を反対され、（相手に対する誤解というより、別の理由からする誤解によるものであったが）誤解それ自体は解かれたものの、そのことの縁で長男でありながら、結婚相手である京子の実家の養子となり、楢崎姓となった点にまず目がとまる。編者の寛治は、この点につき家父長制の意識を脱し得ず、結果として自らの意思と真逆の方向を導き出したものとして、世間的常識に欠けるものであったと浅八に厳しい評価を与えている。もう一つ重要なことは、日本の大学がアメリカに範をとり新制に切り替わりながら、なかなか戦前の研究人事体制（具体的には講座制）を改めることができず、このことに見切りをつけた敏夫が、アメリカに新天地を求めたということである。これは今日にいたるグローバル人材流出のかなり早い時期の事例であろう。

そもそも教育システムは、その国の家族や社会システムあるいは企業そのほかの就業システム、雇用慣行と有機的に連関し、相互依存関係にある。高等教育機関だけ取り出し改革するということは困難であり、まず課程の入り口段階で大混乱を起こしかねない。さればといって初等教育改革から始めるならば、その結果を得るには長期の期間が必要で、その間に課程の出口である社会状況が一変しかねない。得られた改革の効果を社会や企業が評価し、享受できるかどうかは、改革の意図とはまた別のことに属するのである。高等教育が、汎用的で幅広い教養教育と長期を考えた基礎研究や人文社会の研究にも資源を費やしてきたのはそのゆえである。この点先にも述べたように、戦前の教育制度では、社会の要請に従い、その都度新たなパスを増設する複線型教育（+飛び級）によって対応したが、そのため大変複雑なシステムとなってしまい、パスによる社会階層の固定化にもつながった。戦後改革期には、このような明治以来の教育の大改革を社会の改革とともに一気になすはずであったが、高等教育機関改革の妨げになったひとつの要因に講座制があった。そのことを見切ったことで、厳しい競争的環境のアメリカの大学を拠点としながら、久雄の研究は伸びやかに花開いている。大変な努力を重ねた結果であることは、本書のなかからも十分伝えられるが、何より久雄は家父長的「家」と国「家」との二つの「家」から解き放たれ、自由に羽搏いたといえよう。ただし、この時の日本の教育制度の大改革の影響からもっとも不利益を被ることになったのが次男久雄である。また敏夫の去った後も日本の大学に残された旧弊により、東京大学教員となった四男寛治は「東大紛争」というかたちで、その解決に苦闘することになる。

1929年に誕生した次男久雄の「人生行路」は、とにかく波乱に富んでいる。久雄は、旧制青山学院中等部に進学したが、45年青山学院と慶應義塾の中学生は香川県に疎開、ここで軍への奉仕労働を課され、軍人から青山学院は英語教育をし、米英人の教師がいる（この時期については誤解である）、けしからんといわれたということの子息が聞き書きしている。おそらくこの辺のニュアンスは、現代では伝わりにくいので補足させていただく。青山学院はアメリカのメソジストの宣教師によって創設された学校であるから、戦時期には特に軍に嫌われた。偶々評者は青山学院の歴史編纂にかかわり、卒業生ヒアリングをおこなったことがあるので、この時期の兵役猶予を停止され入隊した専門部（高等教育機関）の学生の経験を当事者から聞いている。「耶蘇の子どもは、銃を撃つ必要はない。弾除けになってお国のために死ぬ」といわれた、「自分は同郷の上官に守ってもらえたが、隣の兵舎の校友は毎晩殴打され悲鳴を上げていた。面識はなかったが、その名前は今でも忘れない」といった証言を得ている。さすがに中等部（お

おむね新制の中学から高校相当)の生徒にそこまで酷薄な対応はなかったであろうが、他の学校の生徒との扱いの差は想像に難くない。多感な時期であってみれば、権力を嵩に理不尽な扱いをしてくる大人から、多くのことを感じ取ったとしても不思議ではないであろう。

もう一点本書には、兄弟姉妹の学歴一覧の表が掲載されている。久雄の欄には、中等部・高等部、東京神学大学中退とされており、間違いではないが誤解が生じやすいため補筆しておきたい。中等部・高等部は新制の課程表記で、本文中記載の中等部は旧制であり、表内の中等部と課程は一致していない。旧制中等部を修了したものは、神学部、専門部(文学部、高等商業学部)の専門高等教育機関に進学する。このうちの文学部の課程がアメリカではリベラルアーツカレッジに相当する。ただし、もともと世界宣教方針に基づくプロテスタント系学校合同の動きがあったところに、政府からの強い求めがあったことに抗しきれず、1941年日本基督教団が設立されたことを受け、43年にプロテスタント系高等教育機関の神学部は超教派の東西の男子系と女子系との3校に統合されることになった。このため、青山学院神学部は閉鎖(日本東部神学校に合同)、翌44年には政府方針により専門部も閉鎖、明治学院に整理統合させられている。これにより青山学院の男子系高等教育機関は廃学の危機を迎えた。(青山女学院の女子系専門高等教育機関はその前に、先の世界宣教方針に従って、東京女子大学に合同している)。このため、戦時下でも新たに許される工業系専門学校として青山学院工業専門学校を設立することにより危機を凌いでいる。敗戦を受け、46年同校を青山学院専門学校と改称、事実上旧専門部を復活させた。流れからみると久雄はこの学校に進んでいた可能性がある。

戦時戦後のこのような目まぐるしい制度変更のなかで久雄は、受洗と東京神学大学への入学を決断している。戦時の経験がそれを後押ししたということもあったかもしれない、青山学院の神学部が東京神学大学に継承されたという事情もあったであろう。だが牧師への道を実質意味する東京神学大学への進学は、浅八の意に沿うものではなかった。卒業を間近に浅八は勘当の脅しに出た。これにより久雄は東京神学大学を中退する。いったんは青山学院大学への編入を模索するものの、おそらく新制大学としての完成年を迎えていたからであろう、同大学への途中編入は不可とされた。戦時戦後の経緯からも、青山学院の旧制の専門高等教育課程から、制度変更による移行経過措置期間に新制の東京神学大学に進学していたためと考えられるのである。戦時戦後の制度変更によって、もっとも不利益を被った学年であったといわざるをえない。なお編者は、牧師の道を断念した理由として、浅八の反対もさることながら、石井家の経済的窮状を見捨てることができなかったからではないかと推測している。

そんな久雄であったが、日本電気電話公社に務めると、そこから一転編者寛治が驚愕する「モーレッツ社員」の途を突き進むことになった。公社ではデータ通信部に属し、NTTの民営化によりNTT社員となる。データ通信部は国産コンピュータの育成に深くかかわりを持ち、NTT民営化過程では当然日米貿易摩擦の渦中にも置かれる。久雄自身は情報通信産業進出の意向をもったリクルートに出向、1992年情報通信ネットワーク部門の情報システム担当部長となっている。浅八の時代から一段高度化されたテレコミュニケーション草創期の最前線に立っていたといえよう。しかしこの間に久雄は、リクルート事件にぶつかってしまう。事件については、三男康雄のところに譲るが、事案の該当者にはあたらなかったものの、東京地検特捜部に呼び出され、日々怒号の聞こえるなか、厳しい尋問を受け、国会での証言も求められた。その尋問に平然と耐えた父親の姿を見て、息子が普通の人間の精神では耐えられない、「どのような育ちをしたのか」との感想を持ったと述懐している。戦時に、青山学院の学生生徒が軍から受けた理不尽な体験をあえて述べさせてもらったのはこのゆえである。

1934年生の三男康雄もまた、旧制の中等教育に進むが、久雄とは異なり新制への移行は比較的スムーズであったようだ。進学したのは46年というから戦後になるが、旧制東京高等学校（7年制）であった。同校は日本ではじめて、国内ただ1つの官立旧制一貫教育校（新制6年+大学教養課程1年）である。日本型リベラルアーツを目指す異色の学校であった。47年の高等科卒業生には日本中世史学に激甚な衝撃を与えた網野善彦や日本テレビ放送網を率いた氏家斉一郎がいた。新制への移行とともに、同行の課程は、東京大学教養部1年と東京大学附属中学校・高等学校に移行していったことから、46年入学組の康雄も旧制から新制への移行措置の中で卒業したものと思われる。東京大学文科1類に進学、法学部を卒業すると57年日本電電公社に入社している。子女の証言では、公社での職務は組織改革と労務管理が中心であったとされる。

電電公社は、すでにみたように占領改革によって生まれた新しい組織形態であり、公共企業体は「政令201号」で公務員の争議行為が禁止されたものを、「公企業体等労働関係法」に引継ぎ、組合の争議権が禁止されていた。これに該当した3公社5現業の労働組合は、1953年公共企業体等労働組合協議会（公労協）を結成、それぞれ総評に加盟していた。公労協はその結成の趣意からも、労働条件の改善と並び、スト権の奪還、反合理化を掲げ、戦闘的な労働運動を展開していた。このような経緯から、電電公社では、50年代に優秀な人材を確保し、労務を経験させる政策をとっていたといわれる。康雄は、この意味で将来を嘱望される人材として、採用されたといっただけでよいであろう。

入社後の康雄の社内キャリアに異色な時期がある。1964年から2年間東京オリンピック組織委員会への出向である。ここで他省や企業の出向者との人脈を築き、プロジェクトの組成、事業創造の喜びを体験したという。その後は、北海道通信局課長にはじまり、東北電気通信局、本社、香川電気通信局、九州電気通信局などに赴任、合理化と労使間の正常化のための労使交渉などに従事した。子女によれば、本社では通信局電信課課長補佐として、電報事業合理化のための人員削減計画に従事したが、これを電報・データ通信・テレックスの三位一体による事業コンセプトの一環に位置づけ打ち出すことで、乗り切ったという。通常ではかなり気の減入るであろう交渉を面白いといい、将来の事業展望に置き換えていくというのは、大変楽天的な気がするが、康雄の場合、どうもそれだけではないように思われる。この点は後述しよう。公労協の運動は、75年のスト権ストでピークを迎え、その後は後退局面に入り、国・動労、全通、全電通に色合いの違いがはっきりしていった。81年鈴木内閣で発足した第二次臨時行政調査会（第二臨調）が国鉄の分割民営化、電電公社民営化、専売公社民営化を打ち出したことによって、公労協の組合の道筋が分かれていく。財界の意向を反映し、石川播磨重工の真藤恒が電電公社の総裁に就任、康雄は83年に公社総裁室次長に抜擢される。民営化に向けて民間からトップを迎える場合、プロパーないしネイティブの、内部の事情を熟知した有能な補佐役が、トップの経営理念を徹底して理解したうえで支えることが、事の成否を決する。康雄のキャリアは十分それに応えられるものと評価されたといえよう。民営化に向けた康雄の活躍は、その評価を裏切らない精力的なものであった。全電通は当初民営化に反対していたが、84年ころから方針転換を図っていくことになる。

1985年電電公社は民営化され、「日本電信電話株式会社等に関する法律」（NTT法）に基づく日本電信電話株式会社（NTT）が設立されることになった。初代社長は、最後の公社総裁であった真藤恒、87年康雄はNTT取締役兼東海総支社長に就任した。電電民営化が国鉄民営化に比べ、比較的速やかに進められた理由はいくつかあるであろう。ここは学術的議論をする場ではないが、少なくとも浅八の講演に現れていたように、戦前からみても、技術的、運営形

態的にも民営化がすんなり受け入れられる産業分野であり、将来の産業発展が見込まれる分野であったということはいえよう。康雄は早くに東京オリンピック組織委員会で、組織横断的なプロジェクトの経験を積んでおり、事業の創造、展開の面白さを理解しており、合理化という組織内問題を将来の開かれたビジョンに転換させる交渉を楽しむことができるようになっていたのである。(評者としては、そこに「魅力」によって二項対立を超えようとするハード的な総合力との近縁を感じないではない)。

子女の証言によれば、企画室次長となった康雄は、新規事業のノウハウをまったく知らないと、社外の研修会に参加し、会社経営や事業立ち上げについて学び、新規事業の第1号として、NTTテレカを考案、子会社化し爆発的な人気を博している。さらにNTT経営企画本部企画部長になり、経営上の課題解決、競合優位の戦略的経営を行える体制づくりを命ぜられると、隣のビルに入っているマッキンゼーに飛び込み、民間企業経営についての研修や現場組織の改革を依頼、自ら学んでいる。勉強家であるというよりは、事業創造の面白さをまず知り、面白いから続々と現実の職場のニーズに合わせたアイデアが浮かび、アイデアを実現したいから実務体制の構築を構想するという流れになっている。(もちろん、それは社命に起因するものであったが、それを楽しめているらしいのだ)。肝は、起点が面白さにあるというところであろう。その逆ではない。この意味で、康雄が電電民営化の「立役者のひとり」という編者の評価は妥当であるように思われる。真藤体制のNTTが継続すれば、康雄はこの延長線上に何を描いたのであるのか。評者がこのような感想を持ったのは、実は子女が康雄の趣味に触れ、「テレビや音楽鑑賞のような受け身の趣味ではなく、自分で何かをやらないと仕事を忘れて完全なリフレッシュはできない」といっていたことを回顧していることによる。なるほど音楽であれば、独学でも演奏に向かう。登山などは当然であり、スキーについては、少しでもかじったものであれば感得できるが、ほとんど摩擦のない世界で、ほんのわずかな自分の身体の働きかけによって滑りがまるで違ってしまふ。仕事を忘れるための趣味であるが、面白さという点で仕事とも共通する康雄のセンサーのようなものがそこにあるように思われるのである。

しかし事態は突如暗転した。1988年にリクルート事件が発生する。これにより、政官財から逮捕者が出る。戦後最大の贈収賄事件とされるが、この事件にはいささか奇妙なところがある。リクルートの江副会長は未公開のリクルートコスモス株をかなり無造作に、広範に配っている。このためもあって事件の反響の大きき影響の深刻さにもかかわらず、逮捕起訴され、有罪となったものは限定されており、財界ではNTT会長の真藤恒と取締役2人、ファーストファイナンス社長の、いわゆるNTTルートだけなのである。事件の真相は今でも判然としないところがあるが、確かなことは、NTTルートの4人は、「日本電信電話会社等に関する法律」(NTT法)により裁かれたということである。つまり、NTTは民営化過程の会社であり、特殊に法的縛りのある会社であったということである。この点を真藤会長がどのように認識していたのか、それが明らかでない。このリクルート事件が、その後のNTTのあり方や電気通信産業の未来に影響したかどうかは、これからの研究に俟つほかはないであろう。康雄はこのリクルート事件に連座することはなかったが、NTT常務取締役を最後に退職し、92年NTTリース株式会社社長に転じている。康雄の真骨頂は、そこから彼が、今度は日本初の株式会社による遠隔教育の大学院大学であるビジネス・ブレイクスクール大学院大学の教授に就任し、さらにビジネス・ブレイクスクールの取締役となったことであろう。大学院大学ではベンチャー経営論を教えたということである。

さて、康雄の項を閉じるにあたってひとつだけ、残った課題に触れておきたい。評者は康雄の「仕事」と「趣味」を通底するものとして、「働きかける」ことの楽しみを見出した。しかし、

これは編者からすれば、おそらく「古いルネッサンス型人間観」に当たってしまうのかもしれない。編者はそのような人間観を康雄について否定している。そしてそれに代わるものとして、未来社会にあるべき「自由人」の働きかたを見出している。この「自由人」とは何者であるのか、それこそが本書のサブタイトルである「仕事人間」を超えることを指しているように思われる。評者にはこの「ことば」は、読後なお「謎」として残された。それを解き明かすことは、広く読者それぞれに委ねたいと思う。

長女弘子は、1936年石井家の第四子として生まれている。やはり戦前の生まれであるが、戦争中、隣家で開かれていた日曜学校に通ったことでキリスト教と出会う。主催者は東京帝国大学農学部副手を経て農林省技師であった上遠章で、長男敏夫の恩師であった。戦後受洗した次男久雄に誘われ、田園調布教会の日曜学校、教会に通うことになる。その後新製の青山学院中等部に進学、50年武藤富雄の縁により来日した、メソジスト派の牧師ローレンス・ラクアアの楽団を伴った全国音楽伝道（ラクアア伝道）の集会在青山学院でもたれ、これを機に受洗する。これは浅八には知らされず、糸子が応援してくれたことによると弘子は回顧している。弘子は、高等部に進み、宗教部に属した。高等部では上遠家の日曜学校で子供たちの世話をしてくれた神学生で、その後応召され、戦争から帰ってきていた宗教主任の藤村靖一牧師に再会している。藤村牧師について弘子は、あえて「厳しい戦争体験を経て」と記すにとどめているが、神学生が軍隊でどのような経験をしたであろうかについては、久雄のところで述べたことから推察されよう。もうひとり高等部で出会っているのが、女性伝道師として高名な橋本ナホ牧師である。二人のこどもを病で失い、伴侶であった橋本鑑牧師とも早くに死別したことで、その牧会の道を引き継いだ。その人格的影響力は極めて大きかったとされ、両牧師の存在は、高等部の若者たちに強い印象を与えるものであったということが語り継がれている。高等部卒業のところで、浅八は青山学院女子短大への進学を勧めたのにたいし、弘子は4年制の青山学院大学文学部英米文学科への進学を望み、説得している。弘子が大学に進学したのは、54年であるが、この年度の4年制大学進学率は、男子13.3%、女子2.4%である。マーチン・トロウの定義では高等教育のエリート段階にあり、共学女子にいたってはキャンパス内の希少種であったろう。浅八と糸子が弘子を4年制に進学させることを許したということは、やはり石井家の文化資本のなせるものといえる。とはいえ、浅八のイメージしていたのは、数年間確かな会社で働き、確かな相手と結婚するというごく世間常識の範囲内であったことが、後から明らかになる。浅八は、弘子の就職先から結婚相手まで、弘子の知らないところで探していたのである。

大学に進学してからは、家庭教師をしながら、学科科目の単位を早期に取り、後半には文学部基督教学科の科目の聴講や読書会参加に充てた。特に当時基督教学科にはジョン・ウェスレー研究の第一人者であった野呂芳男牧師が着任しており、学内にあった青山学院教会牧師を兼任していたことから、野呂から多くを学ぶことになった。このときの学びは、その後の弘子の教会活動に大きな力となる。これとともに弘子の人生を決めていくことになるのが、教会学校での教師としての活動であった。ここで弘子は、やはり教師を務めていた神学生の飯澤忠と出会う。

飯澤は、北海道江別の出身であった。戦争中、学徒動員で特攻機を作っていた15歳の「軍国少年」だったという。敗戦の半年前、徴用で飛行場の建設工事に従事していた父を事故で亡くしていた。敗戦の衝撃は飯澤を打ちのめした。飯澤の世代は、浅八の世代とは異なる意味において、戦争によってもっとも過酷な精神的試練を受けた世代だったといえよう。死を当たり前の未来として受け止め、運命を共にしていると思っていた周りの価値観が一瞬にして蒸発し、まったく異なる、昨日までの自分たちを否定する「言葉」を大人たちが平然と語り始める。

ないはずの未来がぼっかりと開いたが、そこには空白だけがあり、そのまえにひとり放り出される。おそらく日本人が、「実存」ということにもっとも近しく触れた瞬間であった。「戦後派」や「焼跡闇市派」の文学によってのみ追体験されるような精神状況がそこにあった。評者は、多大な犠牲のうえに起きた意味以前のこの根源的体験は、戦後日本にとってもっとも大事な体験であったし、そのことは手離されてはならないものと思う。15歳の少年はそれを受け入れることができないでいた。若い日に入信していた母親が、飯澤を教会に誘い、そこで彼は、自分が知らないところで、自分のために祈りをささげてくれていた人びとを知ることになる。そこには信仰とともにコミュニティがあった。飯澤の求道（きゅうどう）がそこから始まった。

弘子は英語教員を目指していたが、卒業の年に公募がないことが明らかになり、貿易会社への就職を決める。このころ牧師となった飯澤から求婚されることになった。次男康雄のことがあったから、父浅八がこれを認めるとは思われなかったが、浅八がその年に亡くなった。浅八の死によって、石井家の女性たちは一気に戦後を生きはじめた。母子は、1年余の後、教会で洗礼を受け、弘子は共働きの必要から、貿易会社を辞し、フェリス女学院の事務の仕事に就くことになった。1959年、忠は北海道美唄市の教会の招聘を受け、転任することになる。それは忠の希望でもあった。当時の北海道、とりわけ産炭地の状況というのは、いまではなかなかわかりにくい。そもそも石炭産業は、戦後の経済復興にとって要とされ（傾斜生産方式）、敗戦後には大量の帰還兵や引揚者を吸収し、雇用を確保した。しかし、高度成長が始まり、石炭から石油へのエネルギー転換が明らかになっていくにつれ、斜陽産業化が決定的になっていく。殷賑を極めた産炭地も、衰退を余儀なくされていく。炭住という生死を共にする人びとによって営まれていた濃密な生活空間＝コミュニティもこれによって失われていった。59年から60年には、戦後最大といってもいい九州の三井三池鉱山の争議が起き、死者を出すまでになった。この争議の敗北は、敗戦後の攻勢的労働運動の終わりとして労使協調路線への労働運動の転換を象徴するものとされる。それは一方でまた、その後の公労協の運動（反合理化運動）の前哨であったともいえよう。忠と弘子の北海道の産炭地での教会活動は、そのようななかではじまったのである。

弘子は教会から、英語教室を開くことを要望され、さらに炭鉱の集会所でも英語教室を開いている。牧師夫人としての仕事のうえに、英語教育の活動が加わり、さらに教会の活動全般にコミットしていく。それを支えてくれたのは産炭地特有のコミュニティの協力であったと弘子は回顧している。（ハワードが構想した田園都市は、自然と共生する職住近接のコミュニティ・ビジョンであったから、環境問題を除けば炭住コミュニティは、そのアイディアの起源（オリジン）の一つともいえる。若い読者には想像しづらいと思うので、宮崎駿のジブリアニメ『天空の城ラピュタ』のパズーの暮っていたスラッグ溪谷の鉱山町をイメージしてもらえばよい。あちらは、金属鉱山になっているが、描かれているのは明らかに炭住である。なお、同アニメの元ネタとなったジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』に出て来るラピュタは、天然磁石の斥力で浮遊している。科学主義のユートピアなのだが、その住民達（科学者）は、常に上の空ですぐに「いま・ここ」を忘れてしまう）。そして、このような全般的活動が必要であると考えたのも、教会員の多くが鉱山労働者で、屯田兵の子孫もいたが、満州からの引き揚げ者、シベリア帰り、上野の浮浪児など、戦争により根拠地にされ、流れ着いた信者だったからだという。（上野の浮浪児というのも、若い読者にはわかりにくいであろう。これも高畑勲のジブリアニメ『火垂るの墓』をイメージしてもらえればよいであろう。神戸三宮駅が舞台であるが、上野には、全国から戦災孤児が浮浪化して集まり、多くの餓死者を出し、その後自然発生的に生まれた闇市に紛れていった）。教会は、そのような人びとに、もう一つの精神的・

物質的コミュニティを提供していたのである。1970年代から、長期の停滞にあえいだアメリカでは、産業競争力を失うなか、多くの企業が破綻していったが、そのような社会を支えたのは、教会と学校であったという。90年代以降、日本では、アメリカの経済政策をカーボンコピーのように受け入れる風潮があるが、その政策が成り立つには、社会にショック・アブゾーバーないしバッファーが存在していなければならない。60年代のエネルギー革命においては、日本はまだ企業内努力や大規模な雇用確保を政策的にとるだけの余力があった。しかし空白の30年を経て、財政も、企業もその余力を失ったとき、いま進んでいる産業構造の大転換を通じて社会に何が起こるかは、実は21世紀のこれからのことに属する。忠と弘子の教会活動は、そのことを前もって教えてくれている。

評者は1960年代後半から70年代はじめまで、父の仕事の関係で札幌に住んでいた経験がある。札幌に移住するため千歳空港から乗車したタクシーの運転手から「内地からこられましたか」と母が聞かれているのに仰天した経験がある。「内地」の対語は「外地」である。「外地」ということで思い浮かぶのは満州であった。自分は「外地」に来たのかとしみじみ思ったことを覚えている。父の勤めたのは北海道大学で、官舎が与えられていたが、そこには一軒一軒まだ石炭庫が設けられており、なんと馬車で石炭が運び込まれていた。周りの官舎にはクリスチャンの家族が幾軒か入居していて、あちらはカソリック、こちらは無教会派という感じであった。それぞれの生活の中に信仰が生きているようで、東京で日曜学校などに顔を出した経験はあったが、少しそれとは違うなと思っていた。あるとき、知り合いの大人が父に、「ようやくここに墓を持つ気持ちになりました」といっているのを聞いて、腑に落ちた記憶がある。北海道は、明治になって本格的に開拓が進められ、和人が流入した。したがって、宗教ということでは、仏教であろうが、神道であろうが、キリスト教であろうが、（一部の集団移住地を別に）ほぼ布教や伝道のスタートラインが同時期なのだ。アニミズムや祖先崇拜という信仰形態は、この開拓地では先住のアイヌの人びとを除き、断絶している。この意味で北海道では、60年代になっても本州とは違う精神の宿る開口部がずっと開きつづけており、戦後の産炭地はその縮図だったのであろう。（都市史研究では、「地霊」＝ゲニウス・ロキという言葉を使う）。しかもその炭鉱は、廃鉱を余儀なくされていった。教会員も半数以上が美唄を離れた。（廃山となった場合、九州の炭鉱労働者の地元に残る率が比較的高かったのに対し、北海道では地元を離れる比率が有意に高かった）。教会の経営を維持できたのは、弘子が英語教室でえた収入の半分が教会に帰属していたためであるという。明治初期の宣教師たちの布教のありようを思わせるものがある。

6年余の美唄での牧会の後、忠は札幌における放送伝道に従事する。これは日本キリスト教協議会の視聴覚事業部（AVACO）札幌支部＝HOREMCOが開設されたことによる。（ちなみに東京のスタジオは青山学院内に置かれていたため、AVACOの活動には学生が多く参加したことから、民間放送の勃興期に放送人や音楽家を輩出することになった）。弘子はここでも英語の教育とともに、所属する教会での教会員としての活動をつづけている。この時期、子どもたちは「自由な環境でのびのびと過ごせた」というのは、同じ時期を札幌で過ごした評者も同感なのだが、60年代末になると評者の父が勤める北海道大学でも紛争が激化した。評者が居住していた構内では対立する党派の乱闘が繰り返され、北大第三農場に隣接する公立高校に進学したが、入学式で校長が開会の挨拶を終えたとたん、ヘルメットを被った生徒たちが乱入、壇上が占拠され、その場で式が閉じられるという経験をしている。それまで当たり前と思っていたキャリアパスに根底的な懐疑を持った瞬間であった。同じようなことが各大学や高校で起きていた。キリスト教系の学校である北星学園大学も同様であったと記憶する。同学園の女子中

学・高校の宗教主任が辞任することとなり、忠は後任を引き受け、收拾に尽力することになった。学園紛争と連動するかたちで、教会活動が大きく揺れたことは、一般にはあまり知られていない。しかし、それが信仰にかかわることであった分、教会のなかには、大きな傷が残された。キリスト教系学校は、その両方の渦中にあったわけであるから、忠の苦労は並大抵ではなかったであろう。後述するように、四男寛治はそれを一身に受け止めることになる。

忠はその後、代々木教会に移り、牧師として働き、弘子もまた英語の教育をつづけながら、牧師夫人としての活動をおこなったが、これと並行し、全国教会婦人会連合の求めに応じ、牧師夫人研究委員会の委員としての活動や、女性牧師の老後の厳しさを憂えた、婦人教職と牧師配偶者のためのホームの運営委員などの仕事に長らく従事することになった。弘子の「仕事」は、信仰という基盤のうえにあり、忠というパートナーとともにあったが、そこには、常にひとつのかかわり、もっというならば、生活に根ざそうとするコミュニティがあったように感じられる。会社の「仕事」とは違い、ひとりの個人として、信念をもってコミットしていくことにより、弘子は戦後という時代における女性のひとつの生き方を切り拓いていったといえよう。

四男寛治は1938年生まれ、田園調布小学校、中学校に通った。少年期にすでに学者を志し、理系を志望していたという。しかし、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』を読み、社会への目を開かれる。日比谷高校に進学すると、社会科学に触れるようになるが、一方で信仰の問題から、自己の内面にも目が向けられていた。高校2年のときに洗礼を受ける。マルクス主義とキリスト教という、当事の若者の心を惹きつけてやまない二つの西欧思想ないし信仰が解かれることなく混在していたが、キリスト者としての一歩が、その後の寛治のスタンスを決定していくことになる。東京大学文科1類に入学、経済学部に進学している。専門となるゼミについては、特定分野に限られることに不満を持ち、各分野を総合的に学ぶ経済史のゼミを専攻した。これは評者も納得できるところで、およそ経済史は、経済学の各分野についての一通りの知識を持ったうえで、歴史の現実=いまと向き合うことが必要になる学問である。(もっともこれは後知恵で、評者の場合ゼミを選ぶにあたって、読みたいと思っていた日本経済論をテキストに挙げていた先生の門を叩いたところ、後になって経済史のゼミであることが分かったという体たらくであった。しかしこれは、成功に属する誤解であった)。寛治は、学部を卒業すると大学院に進学する。ここで、寛治の研究生活とその業績について述べるべきところであるが、どうも具合が悪い。専門を同じくする評者としては、編者である寛治の研究については、本書の紹介とは別の場で、丁寧に進めるのが本来の筋であろう。そこで、寛治の「人生行路」の全体については、読者に本書を読んでいただくことに委ね、ここでは評者が本書を通じて、編者について改めて気づかされた点と編者が触れていないいくつかのことに絞りたい。

評者が石井寛治という名前を初めて意識したのは、学部ゼミの場で指導教員から石井寛治『日本蚕糸業史分析—日本産業革命研究序説』(1972年)、高村直助『日本紡績業史序説 上・下』(1971年)の2書を示されたときであった。最近立てつづけに出た良書としての紹介であったが、日本近代経済史を学ぶものにとって、絹綿産業を学ぶことは王道といってよかったから、ふうふういいながら完読した。評者としてはじめての経済史の専門分野の研究書であった。どの程度理解ができたかは覚束ないが、研究者になるなどとは考えていなかったにもかかわらず、ああこれから向こう10年間、これらの分野はぺんぺん草も生えないだろうなど生意気なことを感じたことを覚えている。実証とロジックが緊密に組み上げられていることだけは理解したのであろう。石井寛治という名前は、まずは実証を揺るがせにせず、しかも「精神の独立性」と「歴史における主体」とを一貫してテーマに追いつづける気鋭の研究者として刻まれたのであ

る。その後の編者の研究は、評者の第一印象と変わらないものであった。しかし本書を通読して今更ながら気づいたのは、あの『蚕糸業史分析』の発行年である。研究は1960年代の大学院時代から進められ、65年の任期付き助手、68年の助教授就任4年後にまとめ上げられたことになる。ところが、68年という年は、東京大学で紛争が激化した時期に当たっている。編者のゼミには学内で遭遇すれば乱闘になりかねない対立する党派の学生が参加しており、安田講堂で全共闘議長の本山義隆との最後の交渉も試みている。加えてすでに述べたところであるが、同時期にはキリスト教界で、厳しい対立が巻き起こっていた。編者は所属する教会の牧師と若手信者の対立のなか、牧師と決別、教会生活を返上し、「脱教会的信徒」の道を選んでいる。評者は、このころのことについてキリスト教界の重鎮に尋ねたことがあるが、温厚で、静謐な人柄の方が、そのときだけ暗く、とても苦しそうな顔をされたので、慌てて口をつぐんだ経験がある。当時の大学教員に、紛争期のことを聞くのとは、まったく異なる反応であることに驚いた。それほど信仰における対立、闘争は苦しいものであったのであろう。およそこれだけのことが起こるなかで、あの本はまとめ上げられていったのだということに改めて気づかされた。

戦後の研究および教育にあって類例のない過酷な環境のなか、編者の研究活動はたゆむことなくつづけられたわけで、その緊張感と集中力はどれだけのものであったかと感嘆する。教育についても同様で、東大紛争によって経済史研究が断絶してもおかしくなかったであろうが、編者と原朗という二人体制のもと、本書にも挙げられているように、その後に東京大学からは、日本の経済史学、経営史学をけん引することになる錚々たる研究者が輩出している。別の例であるが、編者は『日本経済史』というテキストを刊行しているが、その第2版（1991年）が出たので取り寄せたところ、その分厚さ（1版の2倍近くではなかったか）に驚嘆した。編者自身「無謀」と述べているが、そのことより、心から感心したのは、最新の優れた若手研究者の論文が脚注にどんどん挙げられていて、バージョンアップしていたことである。これは容易い作業ではない。おそらく脚注に挙げられた若手研究者は大いに発奮したであろうし、またそれらの研究を、これから経済史を学ぶ学生たちにつないでいく役割を果たしたのである。

研究においてもうひとつ驚かされたのは、『近代日本とイギリス資本』（1984年）であった。これはパートナーの石井摩耶子とイギリスに留学し、ジャーディン・マセソン商会の膨大な一次史料と格闘しながら完成した研究で、石井摩耶子『近代中国とイギリス資本』（1998年）と対をなしている。評者は、編者が大塚史学の影響圏にあると勝手に思っていた節があったが、同書は明らかに大塚史学のシェーマに異議を申し立てるものであった。評者自身は大塚史学とは距離があったが、当時の経済史学の空気を知るものとしては、その大胆さに驚いたということになるのだが、それと同時になるほど「精神の独立性」というテーマは、分析主体である編者自身にも向けられていたのかと妙に納得したことを覚えている。それは、丹念に一次史料を読み解いていく作業を通じ、ひとり（二人）で独自に導き出した結論だったのである。こういうのを言行一致というのであろう。編者の最新の研究は、さらに歴史の総合へと向かいつつあるが、この点についての評価は、別の機会に譲りたい。ただ若き日の編者が、社会の総合的理解と自己の内面への沈潜の両方に開かれていたということを考えれば、本書はいわば後者の側から、前者に接近していく過程として読めるということをおききたい。ここでも問題意識は一貫しているように思われるのである。

最後に、編者が触れていない学問的貢献について指摘しておこう。評者が編者と最初にお会いしたのは、大学院生で修士論文を完成したときであった。愛知県尾西地方の特定郵便局から一次史料が発見され、国家と金融について問題関心のあった評者はそれを研究テーマとすることにした。貯金原簿が出てきたので、貯金者一人一人を土地所有高と突き合わせるという作業

をしていた。郵便貯金については先行研究がわずかで、研究をしたものであればわかるであろうが、そういう状況は大変心細い。それでも作業をつづけているうちに、初期の貯金者たちが、わずかな先行研究において規定されているような零細貯蓄層でないことがわかってきた。これには頭を抱えたが、史料に従わないわけにはいかず、とにかく修士論文としてまとめ、提出して受理された。その間の煩悶をどこかで感じたのか、大学院の指導教員から、「石井君に頼んでおいたから、読んでもらいなさい」と指示された。そこで東京大学の石井研究室を訪れることになった。およそ生硬でくだしい文体の代物であったから、冷や汗ものであったのだが、編者は穏やかに「これでいいのではないですか」と述べられ、自ら丁寧に手書きで作成した郵便貯金の表を出され、実はちょっと作ってみたので参考までにと渡してくれた。これが、評者が研究者としての覚悟を固める最後の一押しとなった。修士論文に、さらに当初の郵便局長層が、局長職を譲り、地方銀行を設立していくことで、地方の銀行勃興が起きていく過程を付加し、学会で報告、学会誌にデビューすることになった。

評者はその後、戦後50年の大きなプロジェクトに参加することで、戦後証券史に研究の重心を移していったのだが、ある日評者の勤める大学の研究室に、通信総合博物館（ていば一く）の方からアポイントが入った。いささかご無沙汰であったこともあり、どのような用件かと訝かっていたところ、郵政民営化によって通信総合博物館の今後が未定になっていること、そこで編者に相談したところ、博物館の史料を駆使し、研究を世に問うことで、博物館の史料がいかに貴重なものであるかを世に周知するという提案があったこと、ついでには杉浦君にも協力を求めたい（ただし予算はない）という編者の「召集令状」を携えての来訪であった。博物館の史料がいかに貴重で重要なものであるかを知るものとして、否やはなかった。そこで設立されたのが、本誌の編集主体である郵政歴史文化研究会だったのである。何もここで編者との交流を回顧しようというのではない。この研究会に参画することによって、編者が郵政史研究にいかにかにさり気なく、しかし絶えることない熱意でかかわっているかを知ったのである。郵便史研究会や郵政歴史文化研究会からは、郵便史、郵貯史などの有望な若手研究者が育ってきている。しかし編者の研究の主動向をそれなりに知るものとして、評者はその熱意にいささか不思議なものを感じていた。迂闊にも編者の父親が通信官僚石井浅八であることを知らなかったのである。後になってそのことを職員の方から聞き及び、納得したのであるが、本書によって詳細を知ることになった。それは評者が受け取っていた以上のものであったと思う。編者は、本書において浅八に厳しい。このことが驚きであったが、それと同時に、（人の内面に分け入り、勝手に想像する非礼を顧みず述べさせてもらうのだが）本書に接し、「石井先生は父上と、これまでずっと対話されてきたのだな」との思いを拭うことができなかつたことを告白する。

1941年生まれの五男章雄は、学齢期にはすでに教育が新制に変わっている。田園調布小学校、中学校、そして田園調布高等学校に進んでいる。大学では建築学に進むことを志望し、東京都立大学工学部建築学科に進学した。卒業とともに、清水建設に入社し、当初設計部を希望していたが、建築部に配属され、建築工場の現場に携わった。おそらくここまでは、特段他と変わるところのない職業生活の始まりであったといえる。ところが、73年清水建設は、海外進出方針を策定し、インドネシアに現地資本とともに合弁会社を設立する。長女弘子などにも手ほどきされていた得意の英語能力を買われたのか、75年その建築系要員として、章男が選ばれた。ここから章男の怒涛の海外人生が開始される。個人としてだけでなく、高度成長以後の日本経済の海外展開をダイレクトに反映するものであった。

戦後日本の対アジア関係は、戦後賠償問題からはじまる。それはまた、アメリカの世界戦略

に規定されるものでもあった。戦後賠償問題については、1958年に岸首相がインドネシアのスカルノ大統領との間で賠償交渉を妥結したことにより、解決の道が開かれる。その後はアメリカとスカルノ政権が対立し、アジアの緊張が高まるなか、かならずしも日本との経済関係は順調に進まなかった。66年のクーデター発生により、スハルト政権が樹立されると、日本政府はインドネシアへの経済援助を本格的に進めていくことになる。さらに、72年、世界を震撼させた二つの「ニクソン・ショック」が起きる。金・ドル交換の停止（これにより世界経済は、変動相場制の時代に入っていく）とニクソン訪中による米中和解である。アメリカの世界戦略は大きく転換した。アジアからアメリカのプレゼンスが後退するなか、日本が経済協力というかたちで東南アジアとの連携を深め、補完するという構図が形成されていく。これにより東南アジアへの日本製品の輸出、日本企業の進出が急増する。ところが、70年代に入ると、このような日本のプレゼンスの増大が、スハルト政権に代表されるいわゆる「開発途上独裁」を支えつつ、東南アジアを経済的に浸食するものであるとの不信感が生まれていく。74年東南アジア歴訪中の田中首相は、タイで学生デモの洗礼を受け、さらにインドネシアでは、ジャカルタ暴動が起きることになる。このことは、日本の経済外交にとって衝撃となった。東南アジアと日本との関係が比較的安定するようになるのは、77年の福田首相の東南アジア歴訪であり、ここで福田首相は①日本が軍事大国となることを否定、②心と心が触れ合う相互信頼関係の確立、③ASEANとインドシナ3国を通じた地域全般の平和と安定に貢献するという、「福田ドクトリン」を発表し、日本のアジア外交政策が大転換してからである。それとともに、累積する国際収支の黒字を還流すべく、日本のアジアへの経済援助＝ODAが急増し、日本の東南アジアへの企業進出が加速した。

以上の時系列を踏まえれば、清水建設の海外進出方針と章男のインドネシア赴任が、まさに日本と東南アジアとの関係が混乱し、大きく変わっていきこうとする只中のことであったことが理解されよう。手さぐりの出発であったのは、清水建設や章男だけではなく、日本政府もまたそうであったといえる。そのようななか、日本企業の現地工場や現地法人の工事受注からはじまり、ローカル公共工事案件や、日本のODA案件、民間工事案件の受注も増えていくようになる。1978年には世銀借款案件であるタンジュンプリオク港第2期工事の受注にも成功した。ここで、章男の海外赴任生活はひとまず終わるはずであったが、81年急遽マレーシアへの出向が求められることになった。81年に就任したマハティール首相が、ルックイースト政策を掲げ、日本をモデルとした成長戦略を打ち出したのである。ナショナル・プロジェクトが次々進められるのに応え、清水建設もマレーシア事務所を強化する必要性が生じていた。章男は、その最前線に立つことになったのである。清水建設では現地資本との合弁会社であるシミズ・バレンバ社が設立され、民間工事の受注に対応することとし、章男は82年に着工となったマレーシア初の国民車工場建設にもかかわっていく。いったんそこで区切りをつけようとしていたところ、86年にマレーシア営業所長に任命される。実はこれも、世界経済の動向が影響していた。81年アメリカではレーガン政権が成立し、レーガノミクスが始まった。インフレ対策として高金利政策を採用する一方、大減税と軍拡・財政膨脹を特徴とする同政策により、アメリカは双子の赤字（財政赤字と国際収支の赤字）を抱えることとなり、70年代につづき、ドルの信認が大きく揺らぐ事態となっていた。このため先進5か国がプラザホテルで会話し、協調によるドル安誘導を合意した。プラザ合意である。これが87年のブラックマンデー（世界株価大暴落）につながるのと同時に、日本ではバブルを生む。当面急速な円高により、日本の輸出産業は大きな打撃をこうむったため、日本企業が生産拠点を賃金の安い東南アジアに移すようになる。その移転先として人気だったのがマレーシアだった。このため清水建設も日本企業の海外工場受注が

急増したのである。

章男は、マレーシアでの仕事が一段落し、1991年に帰国したが、翌年には海外本部米州営業部長の辞令を受ける。仕事内容は海外開発事業整理であった。これは、プラザ合意後の円高とバブル経済によって資金余剰が発生、ジャパンマネーが世界に流出し、不動産投資に向かったことによる。清水建設はこの流れのなかで不動産開発事業にかかわっていた。それが、80年代後半には世界的不動産不況（前期のドル高から後期のドル不安・ブラックマンデーへ）により、大きなリスク要因となって顕在化しつつあった。このための特別チームに動員されたのである。攻めの開発プロジェクトとは違い、ある意味後退戦をになうわけであるから、これまでとはまったく異なるハードなタスクであったと想像される。94年にはアメリカでの特別損失額を確定し、特別チームは解散の運びとなったが、章男は今回も残留を求められた。日本のバブルが崩壊するなか、海外本部の再編成が進められ、章男はシミズ・アメリカ、シミズ・カナダ・エンジニアリング、シミズ・メキシコの社長を兼任、組織再編された米州事業本部の副本部長（拠点常駐トップ）となり、米州の各拠点の組織を再編しつつ、建設事業への本業回帰を進めることになった。93年から円高が進行し、90年代前半にいったん停滞していた日本企業の海外直接投資が盛り返す一方、クリントン政権のもと、「ニューエコノミー」を合言葉に、経済の情報化、ソフト化、脱工業化が進められると、アメリカの景気は好況を迎える。米州における清水建設の実績も上向くようになった。それを見届け、99年章男は帰国し、25年に及ぶ「海外の建築家の人生」に区切りをつけた。

以上みたように、章男の「仕事」人生は、高度成長後の日本経済の海外展開の光と影をほぼほぼなぞり、その最前線にあったといえよう。評者は、この時期の日本企業の海外展開でも、総合建設会社（ゼネコン）の海外展開に関心があった。それは、戦後日本経済の延長線で、日本経済の復興と成長を支えた社会インフラ技術がどのように開発途上経済で活かされ、定着していったかというところにあった。まず、章男の現場からの回顧に教わるのが多大にあったことを述べておかなければならない。それと同時に、日本の建設会社が目のくらむような数々の海外プロジェクトを、稀少な人材の文字通り命を削る活動で支えていたという現実、思いをいたさずにはおれない。（そのことに取り組むことになったのが、六男義脩であった）。なお章男の仕事は一見、浅八の属した逓信省－郵政省と関係なさそうに見える。しかし、戦後日本の都市や社会インフラ整備には、多額の郵便貯金資金や簡易保険資金が投下されてきたことが知られている。本誌第12号（2021年）所収の伊藤真利子「郵便貯金・財政投融资・ODA—援助大国への道」で明らかにされているように、日本のODAのかなりの部分が財政投融资を通じ、間接的にはあるが郵便貯金資金、簡易保険資金によって支えられ、日本の対アジア戦略、日本企業の東南アジアへの展開に深く関係していた。逓信－郵政ネットワークは、技術・情報・マネーを通じ、日本の国土と世界をつないできたのであり、このことと章男の「仕事」は無縁ではなかったはずである。

1944年生の六男義脩は、田園調布小学校、中学校から小山台高校に進学している。東京大学の文化二類に合格し、同じ年に受洗した。東京大学医学部保健衛生学科に進学、当初公害問題に取り組むことを考えていたが、就職を前に、公害問題（地域の公害）は間もなく終わるが、労働衛生であれば、働く人がある限り必要な分野だとの学科教員からのアドバイスにより、労働省に入省した。このアドバイスは、義脩のそれからの人生を象徴するものであったといえよう。折しも労働省では、労働衛生対策の社会的ニーズが高まったとし、保険系職員（ノンキャリア）を採用することとしたため、その採用第1号となる2人中の1人として採用された。当

時国家公務員試験に保健衛生の技術系キャリア試験を設定する機運があったが、厚生省の反対があり、労働省単独での採用となったという。（このような事情に接すると、一連の行政改革で、厚生省と労働省が厚生労働省となったことには、いささか疑問を感じないでもない）。ここから義脩の労働者の健康問題と格闘する日々がはじまった。72年入省早々に、「労働安全衛生法」の制定の仕事に取り組むことになった。法制定の作業がいかに激務であるかについては、現在では幾分知られるようになってきているが、それにしても義脩の回顧に出てくる官僚たちの働きぶりは凄まじく、労働者の健康と安全を守る法律を作成している官僚が、最も過労死しかねない働きをしているというのは、背理ではないかとの印象は拭えない。

それはさておき、同法は、高度成長期の技術革新や生産設備の高度化によってもたらされた労働災害の防止と職場環境の改善を目的として、国会において全会一致で議決され制定された。しかし、1970年代には新たな問題が労働現場に生まれてくる。70年代から80年代は、高度成長が終焉し、先進諸国がスタグフレーションに陥るなか、日本経済が、雇用確保を前提とした労使協調のもと、生産性上昇の範囲に賃金上昇を収めることで、相対的に良好なパフォーマンスをみせた時期である。このことの認識そのものは、大局的にいって正しいであろうが、その裏面でサービス残業など、数値に現れない労働強化や、職場や社会の圧の高まりがあったことは否定できない。リストラクチャリングという言葉が原義を外れ、人員整理と同義に使われるような環境である。過労死という言葉が最初に現れたのは高度成長期の日本であったと記憶するが、その後も減ることはなく、今日にいたっている。認定された数がすべてをカバーしているわけではないが、公式的な数値だけでも世界で突出している。このようにみると、72年の段階で、「労働安全衛生法」が制定されたということは、「労働基準法」と並ぶ、その後の労働衛生対策のための法的堡壘が築かれたという意義を持つものであった。しかし、法制は出来ても、そのことだけでは現実の労働衛生が守られるものではなかった。

義脩は、1976年労働基準局保証課に移ると、専門家会議を開き、「労働基準法施行規則」中の「業務上疾病リスト」の改正に着手する。なんと47年の同法制定以来、改正されていなかったのである。新たに生じた職業病の労災認定に当たっては、リストの「その他業務に起因することの明らかな疾病」で対応していた。そこで、リストの抜本的改正が目指され、医学書や専門書を渉猟し、専門家会議をいくつも開催し、国会での質疑の答弁にも時間を割くという過酷な作業を経て、78年に省令と告示が出される運びとなった。81年義脩は、補償課職業病認定業務係長となった。そこで78年に過度の職場での精神的ストレスにより自殺未遂を起こした件を取り扱うことになる。これを労災と判断し、後ろ向きであった部内と折衝し、84年に労災認定した。これは精神障害が労災に認定されたはじめての例であった。これを機に、国費による「メンタルヘルスケア研修会」が設けられ、予防対策も具体化していく。

これと並行して取り組んだのが、過労死の労災認定基準の改定であった。この基準改正は遅々として進まず、義脩が部署を移動している間になされた改正は、きわめて消極的なものとの世論の非難を被ったが、その後も部分改正がなされるにとどまっていた。1999年、義脩は補償課職業病認定対策室長となる。2000年、過労死の認定を争う裁判の最高裁判決で国が敗訴した。その判決内容が従来の方の考え方を覆すものであったことを掴まえ、ただちに認定基準の抜本的改正に着手することを決意し、専門家会議を設けると、数回の会議で方向性を確定する。これは労働省での退職間際の最後の仕事であった。改定は義脩が退職した後の2001年に公示されることになった。通常このような重大案件を退職間際に、それも方向性の確定まで踏み込むというのは、考えにくいように思われる。それだけ義脩のこの件についての熱意と信念が強烈だったのであろうし、それが引き継がれたということは、この改正が必要なものであることが、省

内部ではともかく、社会において圧倒的に認められていたことを示すものであろう。義脩は、退職後、産業医学振興財団に勤めるが、過労死対策の活動をつづけている。過労死を「業務上疾病」リストの「その他ー」として認定するのではなく、「過労死」として具体名をあげて規定することを厚生労働省に働きかけ、2010年の法令改正で実現させている。この際には、精神障害も追加認定がされた。また予防策についても、2002年過重労働対策の行政指導通達が出されるのに合わせ、振興財団として『マニュアル』を発行し、産業医向け研修会を開催している。過労死認定が高水準にある現在、義脩としては、予防対策は途半ばとの感を吐露している。過労死との戦いは、退省後もつづいているのである。

このほかの財団での仕事としては、厚生労働省がメンタルヘルス対策等の施策の情報発信ポータルサイト制作を受注し、「こころの耳」を立ち上げている。またこれまでの経験と蓄積された知識をフィードバックさせるため、いくつかの大学での講義を担当し、2020年に石井義脩『産業保健の記録2020年—産業保健政策の変遷と課題』を上梓する。これは、重要な施策の経験や知識を後進に伝えるとともに、「記録を残す」ことに重点を置き、統計類や専門家会議の報告書を所収し、CD-ROM化したものである。デジタル化の進行とともに、公文書や統計がいとまたやすく廃棄されたり、改造されている現状を鑑みるに、極めて重要な作業であることはいまでもなからう。

このようにみえてくると、先に過労死と戦う官僚が過労死水準に働くことの背理と述べたことをいささか訂正する必要があるように思われた。義脩にとっての労働衛生という課題は、もはや仕事というよりは、ベルーフ、それも原義としてのそれ＝神より与えられた使命としての職業・天職なのではないかという気がしてくる。(もっともこの理解では、ヴェーパーの範囲にとどまるため、編者の意に沿わないかもしれないのだが)。初めに本書を読んだとき、「仕事人間」を超えてというサブタイトルが、父の立志にはじまり、兄弟姉妹の順に「仕事」が展開され、末子のところで過労死問題で完結している、時代の流れと平仄も合っており、まるでヘーゲルの『精神現象学』のようにぴったりだと唸ったのだが、現実の人生はどうもそのように完結できないようだ。読みこんでいくうちに、超えねばならない「仕事」とは何であるのかという根源的な問いにつき返される気がしてくる。そしてそのように問いかけ、問い直させてくれるのが本書のもっともすぐれた点なのだと、石井家の、9人(+1)人それぞれの、他にないたったひとつの人生行路に沿わせてもらうことでたどり着いた結論である。

評者が本書を本誌で紹介したいと思いついたのは、個人的事情も関係している。評者の母方の祖父は内務省都市計画局の技術官僚であった。1920年に技師として着任しているから、「(旧)都市計画法」制定後すぐの奉職だったことになる。23年にはヨーロッパを視察し、田園都市を具体化したレイモンド・アンウィンの知遇を得ている。石井浅八と同じようなキャリアを積んでいたといえよう。戦前には名古屋市の土地区画割などをおこない、戦時期には満州国からの招聘を断り、帝都の疎開や防空計画を手掛けていたようである。戦後東京の戦災復興計画を立案や、内務省の解体により、東京都に移る。小さいころは祖父の書斎に山と残された青焼きの中でいとこたちと遊んだ記憶があり、祖父の書いた子供向けの世界の都市物語を夢中で読んでいた。しかし年齢を経るにつれ、どうも祖父が描く夢のような「都市」と現実に暮らす東京の街との間には大変な距離があるように思われた。生きている都市とは理性によってする計画ごときでは、とても制御できる代物ではないのではないかという結論に達した。社会に目覚めはじめた機縁でもあったろうか。知らず識らずハワードやアンウィンを批判したジェイン・ジェイコブズの方へと向っていたような気がする。(もっとも、ジェイコブズのハーワ

下批判には、いささか誤解にもとづくところもあったように思われる。むしろ両者に通底する非営利的アマチュアリズムが、今日にいたるまで都市政策の創造性の源泉でありつづけていることにこそ注目すべきであろう。

むしろ歴史上名だたる都市計画は、かなり強硬な専制統治を背景にした空間デザインによるものがほとんどである。しかし、まだ小学生時代のことで、戦争の傷跡が東京のところどころに残っていたころである。統治の網の目は街の隅々、生活の底部にまで届いていなかった。信じがたいかもしれないが、そこにはアガンベンのいう「剥き出しの生」が文字通り転がっていた。評者の通った国立の小学校は、池袋の西口にあり、東京で最後に残された闇市（厳密には、闇市の転化形であるいわゆる復興マーケット）に、戦災を逃れたコンクリート製の戦前の校舎（その半ばは、焼夷弾の炎に焙られ変色していた）が、海のなかに浮かんだ島のように建っていた。まだ白衣の傷痕軍人が路頭でアコーデオンを奏でており、乳飲み子を抱えた若い母親が路上生活者であふれるガード下の地べたに座っていた。その前を、真新しい制服とぴかぴかのランドセルを背に、俯きながら、足早に通り返けた記憶がある。闇市で生徒が何かをされるといふことはなかったし、身の危険は感じなかった（それどころか猥雑で、大人たちの管理が行きとどかない開口部を見出し、解放感すらあったかもしれない）が、教わりはじめた「言葉」の意味が追いつけそうにない、ガード下で感じた不条理さの感覚を、拭うことはできなかった。一方、教師たちは敵意の対象であつたらしく、武道の有段者である教員に引率され、集団下校していた。そのようなちぐはぐな感情をそこここに生み出しながら、東京はつぎはぎだらけの状態急速に復興を進め、いったんは戦争で返上した東京オリンピックを目指していった。池袋も、東口、西口と都市計画の手が入っていくことになり、評者の通っていた学校も在学中に廃校となった。（その跡地が巡り巡ってかの池袋ウエストゲートパークと芸術劇場となる）。その一方、インフラ整備は遅れ、公害問題も意識されるようになっていた。

いまにして思えば、本書資料の石井浅八講演で都市計画などにも触れて述べられているように、経済成長のなかで多省庁の所管にまたがり、多方面の利害にかかわる社会インフラを、最新の技術を採用し、歴史マターである社会に埋め込み定着させていくという技術官僚の作業は、途方もないものであった（ある）に違いない。祖父の家（評者の生家でもあったが）も、露天商に押しかけられ、取り囲まれたことがあったと後に知った。そのことに思いいたってから、政策史や事業史、技術史のエピソードや技術者の英雄譚としてだけでなく、先にも述べたように、近代西欧の自然科学の普遍性と技術の合理性を信じ、最新の知識を武器として、歴史によって形づくられてきた制度や社会に挑戦し、時に時代の激変の中で挫折していったであろう「技官たちの歴史」ということを、失敗も含め顧みる必要があると考えようになった。そこにこそ近代社会の支配的原理＝目的合理性、あるいは技術の合理性、技術的決定性だけでは掬いとれない、学問的に「制度」と一般化され呼び倣わされてきた、歴史的経験のなかで個性化された、それぞれの近代社会の文化や精神性＝歴史的文脈のなかに現れる生の「集合表象」が析出され、ポスト近代における「普遍性」とは何かという問いを、ひとまず逆照射することができるのではないかと考えたのである。日本の場合、特に、旧制の教育制度が確立し、キャリアパスが整備されるようになる一方、一気に世界の中心舞台に投げ込まれることになった第一次世界大戦後の日本の技官、特に旧逓信省の技官の活動と生き方・考え方に注目してみる必要があると思われた。（それとともに、逓信省の設けた学校＝逓信講習所・逓信管理練習所から巣立つことになった、文化資本も資産も受け継ぐことのできなかった若者たちの社会的上昇のためのパスも逸することはできない）。それは、現代における技術先導で進むテレコミュニケーション革命のその先の社会を、歴史の側から解きほぐすカギとなるのではないかとの見通しによる

ものであった。そこに本書が公刊されたのである。

いまでは忘れられがちであるが、日本は第一次世界大戦後国際連盟の常任理事国として国際社会の責任ある地位を占めた経験がある。国際機関にも人材を出し、当時最先端の政治・経済・社会・科学技術の課題に責任ある立場で回答していく立場となった。最新の科学技術や政策科学に直に触れる機会も飛躍的に増していた。浅八もまたそのような立場にある技官のひとりであった。しかし残念ながら、すでに「小国の仮定」が成り立たなくなっていたにもかかわらず、日本は世界とどう向き合うかという課題に内向きに閉じていくことによって、戦争に突入していく。第1部で描かれる浅八の円熟期の仕事は、日本発世界で最先端の情報通信技術（無装荷ケーブル）によって、日本と朝鮮・満州を連結させ、もう一つの「世界」（少なくとも石原莞爾の頭のなかで）を作り出すことにあったが、それは現にある世界とのつながりを断ち切っていく途ともつながっていた。浅八の人生は、当人が最も望まなかったかたちへ向けて、ひた走ったといえなくもない。満州事変、そして熱河作戦によって、大陸での戦争を泥沼化させ、日本はアメリカと事を構えるノーリターン・ポイントに踏みこんでいこうとしていた。満州国は、液状化した大地に満鉄ネットワークによって辛うじてつなぎ留められているだけの、浮遊する実験「帝国」であった。あるいは関東軍が妄想と科学で捏ね上げた双頭の獣であった。技術は、資源を集中投入すれば、突出することは可能である。しかしそれが経済合理性や社会の妥当性において受け入れ可能であるかどうかは、また別の問題である。なるほど満州で実験された技術の一部は、戦後日本経済の復興と成長の種子ともなった（鉄道・エネルギー資源・都市計画・映画・放送・広告etc.）が、浅八が取り組んだ「仕事」は、技術者としてはやりがいのあったとしても、歴史はその稔りを当事主体としての個人や当該社会に享受させることを許さなかった。当時における自然科学、社会科学、人文学の知見を総動員すれば、アメリカとの戦争にいたる途が無謀であったことは自明であった。

もう一つ私事にわたることを許されたい。評者の父は全寮制の旧制高等学校で寝食を共にし、抗日運動に身を投じるため、いつのまにか寮から消え、帰国していった中国の留学生たちに銃を向けたくないという理由で、どうせ軍にとられるのだからと、本来数学に進みたかったところを断念し、医学部に進学、徴兵により海軍軍医として動員された。（当然のことながら軍医は銃を持たない）。それを聞いたとき、そういうことで医者という職業を選択する青春がかつてあり、それが最も身近な人の生き方の選択であったことに驚かされた。一応欧米の最新科学技術の知識にアクセスできる最高学府に学んでいたわけだから、それでアメリカとの戦争に勝てると思ったのと問うたところ、勝てるはずないと思ったと即答した。ただそれがアメリカとの戦いであったということに開放感があったと。死ななければならない理由をそこにしか見だせなかったからだったろう。父は本土決戦に向け、内地に戻されたことで死を免れたが、軍医時代の同輩たちは、艦とともに海に沈み、捕虜の医療に当たったということが禍し、戦犯とされたという。

復員後、父は医学部教員となり、戦争で遅れてしまった日本の医学研究を世界水準にキャッチ・アップさせるのだと典型的な「仕事人間」となった。戦争で優秀な人間がたくさん死んだ、だから生きのびた人間には責務がある、ということを母に話していたという。ところが、評者が中学生のとき、唐突に「医学では人間を本当には救えない。人間を本当に救えるのは哲学や文学だぞ」と言われたことがあった。医学部のインターン問題に端を発する大学紛争が燎原の火のように全国に燃え広がり始めていたころのことである。青年医師たちとの（私的）対話や（公的）激論の日々を送っていた父の思わずの感想であったかもしれない。（もっとも青年医

師連合の医師から、先生は少し頭が固いので、これでも読んでみてくださいと手塚治虫の『火の鳥』を渡されていたので、それをどのように読んだか聞きたくて、感想を尋ねたところ、「甘ったれてる。ひとは死んだら死にきりだ。医者 of 拠って立つ基盤はそこ以外ない」と吐き捨てるようにいって、夢中で回し読みさせてもらっていた私を愕然とさせたりもしたのだが。過激化していった運動の根底には、イデオロギーとは別に、戦前から残された大学の制度と戦後世代の若者との間の拭いがたい不信と断絶（国立大学）、「仕事人間」を大量生産するための「マスプロ教育」への反発と怒り（私立大学）、そしてヴェトナム戦争の影が色濃く影響していたであろう。先進国に同時に爆発した学生騒乱の動きは、そのこと抜きには説明できない。

「戦争」=死の記憶はまだ生々しく、日常の気配として社会の隅々に潜んでおり、ヴェトナム戦争を報じるメディアの映像によってかき筆しられ、疼痛をよみがえらせた。戦争と暴力は、亡霊のようにメディアに棲みついていた。アメリカの公民権運動とケネディ兄弟やマーチン・ルーサーキング牧師、マルコムXの暗殺、第二次世界大戦終了後間もなく、第一次インドシナ戦争が勃発し、ヴェトナムでの戦争は絶えることなくつづいていた。朝鮮戦争が休止した1960年代に入っても、アジアでも、アフリカでも戦争の傷跡はまだ閉じられてはいなかったのである。そして1968年にはチェコスロヴァキアのプラハの春がソ連=ワルシャワ条約機構軍の戦車で蹂躪される姿が映像として飛び込んできた。75年には、米軍撤退により南ヴェトナム政権が崩壊しヴェトナム戦争は終わりを告げたが、同じ年、カンボジアでは、ロンノル政権を倒したポルポト政権による大量虐殺が始まっていた。プラハの春のちょうど10年後、ソ連はアフガニスタンに侵攻し、アメリカのヴェトナム戦争をなぞっていく。そうして、戦後を規定していた二つの実験「帝国」は内部から衰弱をはじめていった。

父は免疫系の病のごく初期の研究者であったが、外からくる病を人類は必ず克服できる、しかし自己自身との、自己の内部=免疫システムからくる、有機体であることの病との戦いは難しいといていた。アメリカの精神分析医カール・メニングァーの「おのれに背くもの」という言葉を重ねながら聞いていたが、組織においても、社会においても異なるところはないように思われた。外部に敵をつくることは簡単であるが、内部に生まれる対立の一方を「悪」として容易く外部に排除してしまえば、対立そのものを可能にした生体機能それ自体が衰弱してしまう。心霊主義・生氣論の基盤となったメスメリズムに遠く源流を求められるジグムント・フロイトが「心」について言っていることも、そのこととそう遠くはないように思われた。後期フロイトがタナトスという概念を着想したのは、第一次世界大戦で発症した兵士たちのPTSDからであった。

日本では、1969年5月13日、東京大学駒場キャンパス900番教室で、後退戦に入ったことを自覚した全共闘系の学生たちと、その行く末を見切り、自らの「終わり」に向け覚悟を決していた三島由紀夫が相対する。駒場キャンパスは、すでに正常化を主導する日本共産党系の学生たちによって制圧されていた。900番教室はその包囲のなか孤島のように残された全共闘系の「解放区」で、ともに「戦後」に異議を申し立てたもの同士の、たった一度の邂逅であった。それは、未だ癒えることのない「戦争=死」を抱えた「戦後」という時代にとって、象徴的な知的事件であったし、もはやそこには右も左もなかったことが、残された映像に映し出されている。（評者は活字にあげられたもので、ほぼリアルタイムで読んでいたが、その後映像がネットにアップされたもの、最近映画化されたもので再三確認した。過剰な言葉は、時を経てもはや臍腑に落ちることはなくなっていたが、三島と学生たちがなにを巡って語っているのかについて感じたことに変わりはない）。過剰な西欧的言説が飛び交うなか、両者を結びつけていたものは、「死」という課題だけだったのかもしれない。このとき、三島はもはや外から自分に、

時宜をえた「死」が与えられる機会が決定的に失われたことを自覚していたらうし、安田講堂が陥落した後の学生たちは、自ら内にかき立てた「死」を生きのびる方途に惑っていたであろう。衰弱を拒否した三島の自決後、街から戦争の痕跡は一掃（今日にいたるジェントリフィケーションの開始）されていき、多くの学生たちは「企業戦士」へと転身していった。この国の経験した「戦争」が、高度成長の終焉とともに、戦後という時代から逸れていく、それは転換点であったといえる。

1960年代後半という時期には、石井家の長男敏夫が戦後最初につかえることになった戦前日本の家父長制的家族、旧態然とした高等教育制度に変化が生じていたことは間違いなくであろうが、繰り返し改革は叫ばれ続けているものの、日本の大学はいまも迷路にはまり込んでいる。四男寛治の苦闘にもかかわらず、社会に埋め込まれた大学が、その実利的な一部だけを取り出して改革のメスを入れ、外形だけアメリカナイズしようとするならば、日本の高等教育は社会のなかで窒息してしまうに違いない。長男敏夫は、アメリカの厳しい大学の研究制度について、丁寧に説明している。それが社会に受け入れられるには、それだけの歴史的背景と社会における諸個人の覚悟（個人主義の徹底）が存在していなければならない。アメリカは、ネイティブ・アメリカンの血塗られた一掃のうえに拓かれ、屹立した壮大な社会実験の「帝国」である。まだその記憶を生きており、反省と反発のなかで生きつづけるオープン・ソサイエティである。であればこそ、旧敵の「外国人」である敏夫が、その実力を認められ、正当な評価を受けられたのである。また次男久雄や長女弘子が学んだ青山学院の戦前の苦しい歴史は、アメリカのリベラルアーツカレッジの精神を日本に土着化させ、日本の学校でもあろうとすることがいかに困難であった（ある）かを物語っている。その長女弘子がパートナーの飯澤忠の牧会活動を支えつつ、クリスチャンとしての女性の社会的活動を切り拓いてきたにもかかわらず、現在においてもOECDにおける日本の女性の地位は目を覆うものであり続けている。バブル崩壊後、混迷の90年代末からは、この国の人びとには新たな「働きかた」が求められるようになっていったが、編者の四男寛治が三男康雄の生きるスタイルに思い描いた「自由な人間」によって生きられる、ゆたかな「時間」は未だ人びとのものになっていない。自殺者と精神的痛み以内に閉じこめられるものの数は、今でも高水準にある。そうであるからこそ、六男義脩の引き受けた課題は、依然として大きなものとして残されている。そしていま世界は、新たな対立の時代に突入しつつあるかのようである。五男章雄は戦後日本企業が世界に本格的に復帰していく最前線を支え、グローバルに展開し、さらにはバブル後の海外の日本企業の後退戦をもになったが、コロナ禍とウクライナ戦争、米中対立によって世界は異なる相貌を見せつつある。しかも第一次世界大戦からはじまった世界の課題が、依然としてそこにある。浅八や次男久雄、三男康雄が邁進したテレコミュニケーションの発展は、グローバル化を先導し、重化学工業化後の世界を垣間見せるようになったが、それとともに「働きかた」を流動化させ、社会内部の対立をも醸成することになった。かつて次男久雄が信仰に通じる道で体験したであろう、対立と憎悪は決して過去のものではなかったのである。

むろんのこと、石井家の第二世代の努力が稔りなきものであったといたいのではない。その反対である。種は撒かれたのであるし、そこに芽吹いたものは多彩に花開いた。しかし多くの犠牲者を出し、国民の全体、あるいは世界の人々を巻き込むことになった、この国が理性をもって御すことのできなかつたあの戦争をまたぐ、一つの家族の二世代にわたる軌跡から学ぶべきことは、今にあってもたくさん残されているはずだといいたいのである。戦後日本は復興と成長を通じ、かつて一敗地にまみれた相手であるアメリカの基幹産業＝自動車産業までもを凌駕する経済大国化を成し遂げた。石井浅八がその先駆をになった電気通信産業の基盤となる

半導体技術においても優れた成果を生み出した。しかしそれ以降の歴史をみるならば、日本が世界と向き合うことにおいて、戦前・戦時の経験を乗り越えられたのかということになると、かつての日本を倍速でなぞるかの中国に動揺しつづけるなど、自らの歴史に学ぶことにおいて大変心もとない。編者である四男寛治はそこに「普遍宗教」と向き合うことなく、それゆえ「普遍」と対峙することができなかった近代日本の一第二世代の知識階級の空白を見ている。戦後の石井家のこどもたちは、それぞれのかたち（学問・信仰・仕事）でその空白を埋めようと模索し、生きた。

いま、この国の若者たちは「働く」ことの前で、呆然とし、立ち竦んでいる。RPゲームのステージをクリアするように、手すりなき時代の社会を生きのびようとしている。もとよりそのことを揶揄するつもりなどない。ただ、いまのところゲームは、仕組まれた課題しか与えてくれている。ヴェーバーは、近代の運命を不可逆的な脱魔術化に見据えたが、メディア・テレコミュニケーション・テクノロジーの変革を通じて、社会の再魔術化がまじめに議論される時代がやってきている。ポスト・モダンも、長い近代でもある。テクノロジーの未来を語るものはうんざりするほどいるが、そのどこに、どのような「魂」あるいは「亡霊」が宿るかを誰も知らない。ただ、人生にラスボスというものがあるとすれば、依然としてそれは「死」だけである。人は「死」に向けて開かれた存在なのだとすることをいまもって教えてくれるのは、文化としての歴史と宗教だけであろう。この国はもう一度、「働く」とはどういうことかを考え直さねばならないところに来ているのではないであろうか。

2023年という年は、戦後という時代が、近代日本の戦前年を越える年に当たる。それは石井家のこどもたちの歩んだ時間と歴史が、浅八と糸子の必死に生きた時間と歴史を超えていくことを意味する。第2部は、浅八が挑戦し成し遂げられなかった課題、あるいは浅八が消化しきれなかった課題に、分野や場所を異にしつつ、様々なかたちでこどもたちが応答していく同時代史として読むことができる。兄弟姉妹のそれぞれの人生に愛情をこめて寄り添いながら、歴史家としての編者は、かならずしも自分たちの時代に満足してはいない。そうであるならば、通信省の電気通信系技官石井浅八と糸子によってはじめられた石井家の人びとの「ものがたり」は閉じられてはおらず、いまを営み、あるいはこれから営まれていくであろう無数の家族や人びとの未来に開かれ、つながっていくに違いない。

翻って、マキャッヴェリの生きたルネサンスは、ゲーテンベルグのメディア革命と融合し、マルチン・ルターの開始した宗教改革を通じて、禁欲的ピューリタニズムと資本主義の「精神」を生み出した、と少なくともヴェーバーはいう。世界のフロントラインにアジアから合流した浅八たち技術系通信官僚たちの切り拓いてきたテレコミュニケーションは、メディア第3革命を通じ、人びとがまだ見たことのない社会を地球規模で形づくりつつある。教育の現場にいると、その心の内を覗き見ることはできなくても、毎年度新入生ごとに、学生たちのリテラシーが段差的に変化していることを痛感する。デジタル・ネイティブというのは、生産性や付加価値だけの問題ではない。それは機械のなかを浮遊する精神＝エートス変容の問題でもある。COVID19は、そのような変化を加速した。長い教員生活でも初めての体験である。「懇切丁寧」なコロナ対策と遠隔教育対応の分厚い「マニュアル」を携え、一見穏やかで、どこまでも愛想よく礼儀正しい彼や彼女たちと、「清潔」に消毒された教室でひさしぶりに触れ合いながら、世代をつなぐ共通基盤（それこそ文化であり、教養であろう）を手探りし格闘する日々が、現場ではつづいている。そこにどのような「魂」や「精神」が宿るのであるのか（AIの急速な進化で、これはもはや表層的メタファーではなくなりつつある）、そして彼や彼女たちを待ち受ける「仕事」とはどうあるべきなのか。ここに沈黙すれば、新たな「空白」が生まれるので

はないのか。評者は、「ある通信官僚の一生」というにとどまらず、自らの生きてきた三世代の記憶を石井家の人びとの二世代の経験に重ね合わせながら、その問いに導かれ、この本を読み終えた。本書が多くの読者にもそのように読まれることを切に願ってやまない。

(すぎうら せいし 青山学院大学名誉教授)